古代連歌抄　高橋知周注

伊地知文庫
文庫20
56

文庫20
56

石田本

古代逸文の集

完

伊地知氏書冊

古代連歌抄

春

明應比西吟　後土御門帝御製

きつにそしはしゆらく玉の緒

かそへきてあへる初子のけふの春　聰雪

前の待恋を松にして子日を附春とまて

つけ絵てしはつ春のはつるのけふの玉

はゝき手にとるからにゆらく玉の緒の

哥のゆし

明應千句　專順

汲上る板井の許の水の音

二千里を遠みきめる若年　紹永

前句板井とあるを若水にとりなしてわかとしと附られたる珍らし此若の字にちからあるなり等閑に見過すへからす

大永千句　聽雪

あたれとも春の光の数なりて

三霞む箭音は人もこたへす　宗長

前句はるの日のひかりにあたるわれなれとの歌なり夫に箭音をつけ一句は

2122

に

春のうあそびにして面白し

竹林集

ことはかりのあらましはらし

附こゝろは聞えたる通りなり身をいはふ春といふことを英めつらし　宗砌

枕草帝に

正月一日すかたかたちつくろひ君をもわか身をもいはひなとしたるさまことにおかしとあり

無野千句　行助

未遠く千とせをこゆる杖突て

五 卯つ月をいはふはきにけり　心敬

前の杖を卯杖にして附られたる吟らし

春夢抄

あたにすましの大原の奥

六 朧なる月も清水をんにて　肖柏

あたにすましといふに清水を尋る月を

附られたる作意面白し　大原におほろの

清水し

園塵集

まつしまや小島と誰も思ふらん

七 霞わけたる難波すみよし　兼載

是はみちのくの松島こしまを難波住よ

しのあはれの霞たるにとりなしすみよ

しは松の名高き名所故更に松島とも い

ふへきとの一句の仕たて寄此の作意也

独吟抄あらはの中

出ては小田を返す里人

八 未霞む山下ろに牛ほえて　心敬

附句は聞えたる通りなり犬吼てなとは
常の事せ牛ほえてはめつらし

宗祇筆の附句の中

着よこすや麻の衣の玉襷　宗砌

九　田すきかくすは春の里人

前句きよこすといふを田を耕す賤のた
すきゆひたるにしてたすき匹すと秀句
にかけられたる作自在し

賛句杉てけりの中　忍誉

波をや雲のそてにかくらむ

一〇　ひかたよりしほ見ひろふ玉たすき　親當

是また玉たすきを附られたり前句のか
くらんといふに面白し此句春ならねと
も玉たすきの作例故爰に入

永正千句　玄清

氷とく池のかゝみはさやかにて

一一　用ひらるへきはるは見えけり　宗長

池のかゝみといふをわれをもちゐのま
すかゝみの哥にての見かへなり

古写本の中

木のめも色に出る梅かえ

一二 雪きえし賤が垣根のはたつもり　宗砌

前句木のめといふにはたつもりをつけられたり今法は山家にて春の頃若芽を摘物しはたつもり積りし雪の消めれは賤かすまひに若葉をそつむの哥のこゝろ

韵字独吟

通さぬ清水岩そさゝゆる

一三 まては猶めくるも遅き盃に　正徹

前の岩にさゝゆるを曲水に見て附られたり盃の遅きといふこと珍らし此句春ならねとも盃のおそきは曲水ならすしては有ましき故美に入

熊野千句　常安

何のしらへそ河音の雨

一四 岩こすもしらぬ霞の堺れ水　宗祇

是は前句のしらへといふを琴に見て附られたり琴柱の上をいはこすといへは面白し

文安千句　　日晨

一五 痩ては帯そ二重三重なる

雲霞大原の島や暮ぬらむ　良珍

前句の二重みえにそひき物をふたつ附て痩を八瀬の里に見かへて大原をつけられたる工にして面白し

賛句人やいつの中

みかゝ、ねと石もかゝ、みのかたちにて　宗祇

一六 玉島河に月も霞まず

みかゝ、ぬ石といふをかゝ、みの宮にして

玉島河を附られたるとりなしし。

筑波集に花のかゝ、みといふに宗般法師の玉島の梅を附られたる類し

竹林集　宗砌

なやらふ夜はにとしは暮けり

一七 春のきてひゝなあそひはよもあらし　賢盛

前句の歳暮のなやらふを源氏物語紫の上のひゝなあそひをいめきかいさめてなやらふとあり是にとりなして面白しいま雛あそひを春のことく思ふ俗習

はとゐへからす

佐渡國に傳りたる文安中親王ゐ黙の中

なかれゆく玉島河のうち霞み　　長名

一八春のはや瀬にあゆそひかれる

玉島川鮎の名所こひかゐとせられし面

白し予壮年の頃武藏秩父の邊甲斐國の

山川にて岩間のあゆの走ゐを度〳〵見

たり実景なり

殺句榊葉にさくやの中　　心孝

暮ゆくけゐの末の舟みち

一九みなとさへけふはさはかて霞む日に　　思誉

前句春の末といふを春の淋にしてし暮

てゆくはゐのみなとはしらねともの哥

の心面白し

十花千句　　牡丹花

そことなく紫おふゐ野を分て　　玄清

二〇こゝろつくしに花やたつねむ

前の紫おふるといふを紫にとりなし

てし紫にもむらさきおふゐのへはあ

れとの哥にて面白し

家集

身をしらぬこそ累なりけれ

二一 ことの葉の花にゐをかけ置て　基佐

前句の身を實に見かへて言の葉の花實の分別おもしろし

家集

遠島もりのさそなかなしき

二二 ゆくはるの後の鳥羽山花もなし　心敬

遠しまもり戎後鳥羽陵のさすらひ絞ひしことにして附かためつらし

家集

いそく便はことの葉もなし

二三 移ろふを見よとて送る山さくら　基佐

移ふを見とこと附て恋の部に入られたりとはれぬをかこちたる心面白し

竹林集

あやにくにしたふを春や歸るらん

二四 咲散花のふたむらのやま　能阿

あやにくに二むらと出たり綾の縁詰し

咲ちる花の二むらなと一句面白し

文安千句　　聖阿

法のうへ木の種はこころよ

二五 池ちかきさくらか許の舟遊ひ　　宗砌

法に舟は常の事こうへ木といふを櫻に

して附られ舟遊ひの名目めつらし

宗祇草庵千句　　童阿

夢交りをいとふはかなさ

二六 花も只散れはわかれぬ太山木に　　惠俊

前句夢交りといふ處に附かた工なり源

氏物かたりにたち並ひては花の傍のみ

やま木といふ文をとりてせ

園塵集

咲こそ殘れ花の一もと

二七 長閑なるはるの半の夕さえて　　兼載

前句は散殘りたる一本の花を附心は咲

人とせしに又迚て咲後れたると附られ

たるめつらしく面白し

十花千句　　牡丹花

しつはたに遊ふ糸をやかけて見ん

二八 山には花の錦をるなり　　聽雪

前句の糸ゆふをおもしろくあやとりて
附させられたりしかも短句にてやすら
かにして面白し山はしつはたゑせ

寶徳千句　忍誓

三月の梅は實にそしらゐ、

二九　墨染は花に匂はむ袖ならて　專順

前句の實にそしらゐを身にしうゐ、
にしてなり墨の袖を死なき梅にたくへ
られたゐ作意工にして面白し

花のまかきの中

庭なゐ花の枝をこそをれ

三〇　山からす巣をハいつくに造ゐらん　良阿

前句の花の枝を巣のために鳥の折たゐ
にして面白し

家集

折かへゐ木に花を移ゐふ

三一　飛鳥や山にふゐ巣を殘すらむ　基佗

是も附て、ゐ前におなし作意面白し

熊野千句　心敬

かへして千折花の一えた

三二 巣を造る鳥やかゝるを思ふらん　盛安

是もつけくゝろ前におなしかへしてと
有ゆへ卯と近附られたる面白し

名所連歌の中

時しらぬ山には春や過ぬらん

三三 つゝみの瀧のうち霞む音　宗砌

時しらめといふに数一句仕立奇妙也

俳句むかふはの中

櫻もよきぬ鞠の暮かた

三四 春に見しゐ垣か原もわすられす　能阿

鞠にみかきか原と附られたるめつらし
いま俗にいふまり垣にはあらす只とり
なしも

寶徳千句　原秀

さらぬわかれは誰かのかれん

三五 花の、ちはも長岡の里あれて　忍誓

前句のさらぬわかれを花のわかれにし
て長岳は彼業平の母公さらぬわかれと
よみ給ひしをとりてこ自在なる作意と
や申へき

独吟千句

賢き名をはいひつたへたり

三六 さわらびを折人多き山辺に　兼載

前句の賢人を伯夷叔斉にしてこ蕨をは
詩もおる山辺よと附られたるにて伯叔
の名きらりと聞ゆる句作妙なり

草木の名独吟

なびく柳も青きいとゆふ

三七 葉をかはす柳に花も染られて　正徹

前句の青き糸ゆふも面白し夫を花をそ
めし柳いよ〳〵工なる物し枝かはすは
常し葉をかはすめつらし

十躰秋杪の中

三八 雁かねかへる三日月の前　良阿

乙しれる文とゆとはきこえけり
附心の見かへ按群の物し聞えけりに雁
かねと出たり

連哥傳の中

雪こそ棹の末は見えぬれ

三九 花落す鞠は枝にやとまるらむ　専順

前句は雪のしるしのさほし丈を花の枝
にかゝりたるまりにさほを用ひたるに
してめつらしき附心し

家集

井出の山吹にほひぬるころ

120 散しける花は諸枝の名残にて　心敬

前句の井出を井堰の左大臣にして諸足
をもろ枝と附られたる粉骨面白きこと
奇とやいふへし

連歌仙の中

はかなきことをおもふもそうき

121 いかにせはちらしと花にあくかれて　宗長

附心は聞えたる通りし前句の恋をめつ
らしく附なされて一句ことに面白し

獨吟の中

かゝみの山もくもるはるさめ

122 帰る其やよひのすかた見まくほし　兼載

かゝみに三月の海し春のすかたなと
は常の事なり三月のすかた珍らし

古写本の中

都鳥てふそれもむつまし

ゝ三 山ふかき花に鶯かへり来て　宗長

山より出て又帰りたる鶯をは都鳥とも

いふへしとこ珍らしき附合せ

西嶮　聴雪

よくなりぬとの時に逢はや

ゝ四 山梨の實のとしきりを花に見て　宗牧

前句は伊勢物語のこと葉かきによくな

りけりとあるこなりめを梨にしてとし

きりは隔年に實のることりなし珍らし

ゝ五 井関の水に花をかたよる　行助

連哥傳の中

打けふるふせ籠のもとやゆふらん

是は前句の伏籠は貴人の上の句こ夫を

河きし堤などに茨水を防くためふせ置

ぬる蛇籠に見かへて井せきと附てよく

聞せられたり一句も穏にして附合の粉

骨耳驚かれぬる佐意こ

春夢草

いまはたおもふならのいにしへ

二六 雲と見し人をや花も思ふらむ　牡丹花

前句は南都の懐旧常にある句なるを人丸のめには雲を見えとあること葉をとりて奈良に思ひよられたるめつらしき附こゝろ也

夏

名所連哥の中

二七 音には夏も中河の水　巻あくろ伊豫簾のもとは風さえて　宗砌

前句いよすといふを源氏空蟬の巻伊よを今にとりなされたる工にして作意おもしろく涼しきけはひ見るやう也

家集

青紫をたく山の下菴　基佗

二八 乙もなきしけみ隠れに百合咲て

ゆりをともしひと見るは常の事也青葉をたくといふに百合珍らし

草木の名独吟

短夜そむくけさのともしひ

二九 夏草や月ゆりこぼす花の露　正徹

是亦ともし火をゆりに見かへて附句や
すらかに面白し

家集

三〇 のぼる岸にあせをぼす人
夏衣うすみの山路こえやらて　心敬

附心は聞えたる通りにて拔群の物なり
此句は諸抄に載て人のよくしる處し

住吉千句　堯空

谷を隔てゝ水の音のみ

一 五一 夏衣こえて汗ぼす山高し　宗碩

是亦あせぼすと出たり高山をのぼりた
る人見るやうせ

寶德千句　満綱

五二 袖ぬらす雨さへあせのごとくにて　宗砌

君かこと葉にいつはりはなし

是はいつはりはなしといふにあたりて
偏言あせのことしとして附られたり作
意あつらし

草庵千句　宗長

かきたえ人そうとくなりゆく

五三 絶せし山興の道の上久て　宗祇

前句のかき絶といふをみこしをかくと

とりなされたり跡のかみさびてと十分

なる附かたせ

住吉千句　宗碩

餞慶き、をさへ忍ひそ八ぬる

五四 鳴ぬ間はいさやあま彦ほと、きす　尭空

前句の餞慶き、もめつらし其恋句を鳴

ぬ時鳥にしていさや天彦おもしろく附

なし給へり

下草

宮は祝かへりつ、鳴物を

五五 行通るすなゆくほと、きす　宗祇

附こ、ろは聞えたる通りなり行通り珍

らし

名所連歌の中

聞もめつらし此都鳥

五六 はと、きすけさは音羽の山こえて　仙敬

前句の都鳥に音羽の郭公を附て都にき

ぬる時鳥は更に都とりともいふへきと
なり此附句の物骨大かたに見返すへか
らすつけ方の一躰成へし

同

ゆふつけ鳥の梢にそなく

五七 逢さかや関のとやまの時鳥　兼載

是又前におなし附方し逢坂山の梢は皆
ゆふ附鳥のわか物に卜置たるを時鳥の
奪ひて鳴ときかせたる物也前句は庭鳥
の木に鳴句こ天に逢坂のほとゝきすを
やすらかに附て只前句のこと葉をよく
味ひたる作意他の及へきにあらす前句
ゆふつけ鳥のといふの、字をうこかし
て附られたる處奇妙也

十花千句　宗碩

妻ことに軒の柏木枝しけみ

五八 若き楓に交る紅　堯空

若楓のくれなゐ珍らし春の芽出しより
初夏まて楓の紅凡情ある物こ

發句花そころ千句　英阿

袖かへしてやうたふうと濱　雪順

五九 駿河なる田子ははる夏いとなみて

是又玄妙の附句也前句は天人の舞の句なるを駿河のうと濱と出袖かへしてを春の田にとりなしうたふを夏の田唄にして十句の見かへせ

竹林集

614 六〇 潮の聲に日こそ暮ぬれ　賢盛

幾夏を清水の寺に結ふらん

観音經に法界大潮の音とあるによりて清水寺にして結ふ清水と附られたる工にして面白し

同

594 六一 うすきを雪は見るもふりせぬ　宗砌

白妙の肌すきたる夏ころも

雪のはたへにとりなして也前句に薄雪とあるより夏衣と附てゆきのはたへをきらりと見せられたること此めしの例の自在の作意なり

同

かけふかくなるもりの下草

六二 尋めへき跡も夏野のはなれ駒　行助

大荒木の森の下草おひぬれと駒もすさめすの哥のこゝろもて附られ一句もおもしろく放れ駒の名目珍らし

独吟

仙あらはの中

かゆれは夏の衣とそなる

六三 空蟬のはしめは土に埋れて　仙敬

夏衣をせみの羽にして身をかゆる蟬をおもしろく附られたり

584

六四 けさかへる夜はの里人鵜をすへて　宗砌

竹林集

小舟さし捨かちよりそゆく

附こゝろは聞えたる面うなり　うかひ人のかへる気色見るやうにて鵜をすえてといふこと葉眠目なるへし小舟さしすてといふにけさ帰るの初五奇妙也

文明独吟の中

六五 鵜飼の翁夜をやまつらむ　定賢

静かにも河邊の舟に火を焼て

河邊に火を燒といふ前句に夜をまつう
かひの翁けしき又見るやうに面白し連
哥は句作りによりてふるきもあたらし
く聞ゆるし

竹林集

524

六六 あさちふを鹿のわくる小野の山　宗砌
胸にせくこそ音なしの瀧
前句の胸にせくといふ恋を小野山の鹿
子に見かへて音なし故なかぬ鹿し鹿の
もねわけといふことのあるをとりて細
やかに附られたる作意し

名所連歌の中

六七 富士には五月六月の雪　兼載
長雨のころもわすれすふりそめて
前句は五月雨の時をわすれすといふを
夏ふるふしの雪を附てわすれすといふ
を慥に押へたる又奇妙し

同

六八 六月もはつ雪ふりぬ不二の嶽　兼載
はや此山に冬は来にけり

此山とことはりたる前句に不二の六月
の雪と附られて冬きにけりといふにい
と面白し

下草

わたろそ遠き滋賀のうら舟

二九 野をかけて水の海なる五月雨に　宗祇
水の海と湖水をとりなして附かた面白
し

同

命には何をかたのむかけならん

七〇 思ひによるの虫のかなしさ　宗祇
附句のしたてはほたるこ思ひと附て
灯のもとによりくる夏むしの命ははか
なきと聞せられたり

寶德千句　満綱

鳴山鳥の尾上ゆく雲

七一 咲殘るしたりさくらは夏かけて　忍誓
山鳥にしたり桜の名目めつらし

分白集

吹風にさしわつらへる舟の中

ゆふたつ雨は笠もたまらす　宗長

附こゝろは聞えたる通りと差わつらへるといふに笠もたまらすの附面白し

沙石集の中

舟の中にて老にけるかな　無名

浮草の憑植の水になかれきて

舟の中にといふを筧にして老を生の見かへ面白し沙石集は弘安二年釋無住集

同

ろ廣こ

親はかくして子は老にけり

わか宿の外面に栽しこゝとせ竹　明覚坊

是もおもしろき見かへなり附句夏とも聞えねとも爰に入

同

名乗ていつるほと、きすかな

物部の楯を並ふるとなみ山　東入庵

是も面白し雜の句なれとも爰に入

發句むかふ日はの中　長桓

沒へる鳥を水の上なる

かけふかく青き楓の花散て　貞親朝臣

附こゝろは聞えたるまてこ楓の花めつらし

寶徳千句

暁のかねのみたけは吉野にて　宗砌

月をあろしの夕かほの宿

かねのみたけといふを源氏夕かほの巻

みたけさうしにとりなし暁に妙こ

家集

学ふへき聲こそなけれふ規

月の色かろ卯花のこころ　基俊

卯花は月の色をかりて咲まかへたるに

時鳥は学ふへき声なしとこ附かたの粉

骨奇妙なり

十花千句　宗碩

ふるさとは跡も夏草ひき結ひ

枕の物とはたろをやそんし　宗哲

いせ物かたりの枕とて草ひき結ふこと

もせし秋の夜とたにの哥にて附られた

り前句のひき結ふといふより出たり此

1942

句なとを大かたに見過さは作者のふかき心用ひを後にすへくせ

竹林集

假そめに草ひき結ふのへの庵
旅とは見るや枕とふ月　賢盛

是又前の哥にて附られたり一句もことに面白し附句秋なれとも同等故爰に入

下草

暮れはあくる夏の夜のそら
かけあつき西日にしはし戸を差て　宗祇

前句は短夜の句なるを一日の暮にひき違へて附られたるとりなし面白し

家集

一夜あくれは夏は来にけり
夕す、み秋かとおもふ月に寢て　基俊
是は卯月のたちたる前句を夏の一夜ちけたるにして又面白し

名所連歌の中

いまも殘るそ鳥の跡なる
神山の麓は末の世をかけて　宗祇

前句は文字の句なるを加茂の祭酒の日にしてせいまも残るといふを末の世にて押へられたること奇妙也　順

素眠筆庚哥に

葉廣なる木は猶凡の音　侍公

持ならすやふれ扇は芭蕉にて

やふれ扇めつらし葉廣といふをはせを

のとりなし面白し素眠は文明中の能書

なり

寶徳千句

凡すさふ秋の扇は置はて、

やふるゝ芭蕉露こぼるなり　原秀

是亦秋の扇にやふるゝはせを、附られ

附句も秋なれとも前の等類故爰に入

發句発ところの中　昌成

出の名のすゝのしの原かれたちて

此河やしろふりそ残れる　專順

前句の鈴出にふり残ると出しのに河社

こ河やしろしのにをりはへほす衣の哥

の句面白し

同　　專順

こゝろはしのに乱れてそふる
ぬれきぬをほすや涙の河やしろ　宗砌
是又しのに河やしろし涙の河やしろこ
とに面白し

壁草の中

音も秋なる水の白なみ
夏衣ほすともいつか河やしろ　宗長
是もほすともかはかんを河やしろにし
てなりおもしろし

明應千句

いみあるは水も結ふな河社
ぬれてほされぬ藤の衣手　專順
是又河やしろにほされぬ衣なりとりな
し面白し

寶德千句　　超心

涼しき波に石も乾かす
硯には水無月の名やなからまし　宗砌
石のかはかぬといふに硯すゝしきに
月を出されたる一句工にしてやすらか

に聞ゆることと奇とやいはん

十花千句　玄清

こえめれは老のとし又数そへて

絶めみそきをけふや菅めき　聽雪

前句のこえめれはを菅めきの轉にして

述懐の句をみそきにとりなし綜せ　粉骨

元慮の外し

秋

明應千句　宗祇

注蔓にかゝる露のはかなさ

うすくこく衣に秋の色みえて　專順

蔓を裳にとりなされたるめつらし

西啥千句　宗碩

といひかくいひあらましのころ

植たつる秋の千くさのませの中　宗長

といひかくいひをませをゆふにして荒

ましといふにもよし聞ゆるなり　いふ

ゆふのかな違ひはあまたあることし

明應千句

いくらの人の玉祭るらん

諏訪山やすゝきふく屋の露分て　紹永

塊祭をすけの市射山祭にして玉祭ると

いふに露よき寄合し

寶德千句　宗砌

神わさをすゝきの穂屋の諏訪の山

つくれる罪をすゆる狩人　時述

是又前句のみさ山祭に秋の狩にして附

たりつみは小鷹の名なれは贄狩につみ

を居るを罪にしてつくれるとはほ屋を

作るにとりなしナ分なる作意し

文安千句　宗長

名殘さひしきふる宮の秋

かりふきし尾花か霜に軒朽て　忍誓

是また前句のふる宮を市射山の祭の跡

にしてふく屋の軒朽てととりなされた

り面白し

花そころの中　忍誓

髪の半を白くなりぬる

いさよひの月まつ窓にむかひゐて　超心

髪を紙に見かへて窓と出半白きとある
故いさよひの月しめつらし

同　吉理

又かきならす夜はの琴の音
春かせやみねなる月を送るらん　賢盛

琴に松かせはいふに及はす常の事なから
又かきならすをみねなる月の松かせに
さそはる、けしき逝、云し

同　專順

ゆく秋の末なる月はうに依て

霧ふるあしたの虹も立けり
有明を虹にとりなされたるめつらし　宗砌

下草

又も色なん有明の月
宇治山の暁さひし秋の雲　宗祇
花撰か哥は秋の月の暁の雲にあへるか
ことしといふこと葉にて又も色なんに
暁の雲を附られたるめつらし

花のすさみに
宇治のわたりの山のはの月

あかつきの雲にはつ雁声はして　專順

是は宇治に暁の雲わたりに雁を附ら
れたり源氏物かたりに此世をかりといひしらすらんとあり

草庵千句　宗友

逢ことにかへんたとへは有しせに
あかつき月の宇治山の雲　宗怡

是も逢といふに暁の雲に附こゝろ前に
おなしく面白し

名所連歌の中

逢時は又あかつきを恨にて
雲に月すむ宇治の山端　兼載

是又前句の逢恋を宇治山の雲にて附ら
れたりいつれも心おなし

竹林抄

なしはゝ釣簾にしたふ面かけ
さをしかの跡を大野の梓弓　心敬

前句のをしはゝに梓弓大野は釣簾の大
野にしてこ一句は鹿を追といふに懸ら
れたり悪残見かへて十分なる作意せ

花そころの中　原春

ことの葉は手向の秋のあまの河
あしたの霧の梶かくす舟　利在

七夕のわかれのけしきに附て一句はさりけなく朝霧に舟のかくれたる句し梶かくすのとりなし眠目なるへし

竹林集

1042

木を伐る音のしからきのさと
あしろうつ田上河の末のあき　智蘊
木をきるといふを秋より網代をいとな
みまうくることにしてし田上は網代の名所しからきも遠からすあしろうつは秋になるし面白き句作なり

古写本の中

頓て跡なき文の一筆　心敬
はつ雁や花のそらめに霞むらん
文に鴈は常のことし花のそら目めつらしく面白し

家集

雲に出入日のおもかけ

椎の葉のうら吹かへす秋のかせ　琴佑

椎の葉の白くみえたるこ月の俤といふ
によく聞えたる物こおもしろし

十花千句　真宗

かねを枕に送る秋かせ　宗長

をく太刀のさやく露霜打はらひ

かねをたちにとりなし一句も夫といは
すして旅の気色に　みえて面白し

古写本の中

月もさそなれぬる露をたつめらん

野原のむしの籠の中の聲　琴佑

前句は露を尋る月なるを籠のむしに野辺
結びて附たるにてむしの心にかはりてめ
つらしく成たり連哥はか、る處によく心
を附て見るへきにや

寶德千句

白波のよるの恐れは月もしれ

尾花ちる野にきつねふすらし　宗砌

前句の白波は盗人こ夫を尾花にしてお
それといふを狐のふすらんと附られた

ろ粉骨他の及さる處なり

附句集

夜の間に移ろ心なりけり

誰か又けふを十日の菊の陰　宗祇

夜の間にうつろ恋を十日の菊に見かへ

られたるいと面白し移ろといふ字をよ

くあつかはれたる物と十日を問にして

也

獨吟の中

後のあしたも又そ寢にけろ

人はよも十日の菊に蝶のきて　兼載

是もものちのあしたを十日の菊にして附

こゝろ面白きことといふはかりなし

連集良材

月もふけゆく四の緒の聲

秋の夜は子をおもふ鶴も恨むらん　宗祇

四の緒といふに白氏文集五絃彈弄四の

聲は冷ことして夜鶴懷子籠中に鳴とい

ふこと葉をとりて四のをといふに附ら

れたる粉骨心深し

西嶺千句　宗長

かけさろ月もとこあらはし
まはらにも萩あみそふる芦簾　宗長
簾を月の淺たるけはひし萩をあみたる
すたれめつらし

竹林集

焼火しめれは月そふけゆく
きりゝす秋のかくらをうたふ夜に　賢盛
前句の焼火を庭火にとりなしてきりゝす
すのうたふかくらめつらし

同

日よしのかけそ北の峰なる
幾山をかへる つはめの巡つらん　賢盛
日よしを社日にとりなし北の嶺といふ
を歸る燕奇妙の見かへなり

同

西行はしめのすみよしのかみ
秋すてに月に成ぬる夜や寒み　能阿
西行はしめに更ゆく秋を附侘よしに夜
や寒きのこと葉ふかく心は用ひたる作

こ夜や寒き衣やうすきの哥のこゝろし　超仙

花そころの中

虫の音しけき庭とこそなれ

松の室すゝの庵に秋はきて　宗砌

むしの音しけきを松むし鈴虫にして松

の室すゝの庵一句の仕立自在なる物し

すゝは篠しのをふきたる小屋の類なり

文安千句　専順

聲うち乱れ虫を鳴なる

かりふけすゝのしの屋は軒ふりて　盛家

是また虫にすゝのしの屋と出たり鈴む

しにしてし此句雅なれとも作例見やす

からんかため爰に入

浅間千句

すゝのしの屋の露のかりふし

かきりなく聲ふりたて、虫もなけ　宗長

是亦すゝのしの屋に鈴むしにして聲ふ

りたて、と附られたり附方の規則みな

かくのことし

独吟の中

聞なれぬにしあかぬ琴の音　聽雪

萩の花白き入江の舟の中

附こゝろ琵琶行にしてなり聞なれぬと

いふに白萩めつらしくとりなし仮へり

萱草

芦の根寒にかせ落る声

すそたえぬ秋のさころも露けくて　宗祇

芦を足に見かへて裾たらぬにてよく聞

せられたる物し

八幡宮法楽獨吟

よもきかぬ秋のはつしも

衣うつきぬたはいかに更ぬらむ　宗長

衣うつきぬたとつゝけてせられたるぬ

つらし

竹林集

手に手をそとる神拜む人

3062

祭せし度のこよひはすまひにて　宗砌

前句の手に手をとるを神事の度の相撲

に見かへられたる耳驚くはかりの作し

いかなる難句をもやすくつけなさるゝ

ことの他のあへきにあらす

宗砌作花のまかきの中

親のいたみや子にあたるらむ

狩人の箭先の鹿のはらこもり　良乃

附こゝろいふに及はす鹿の腹こもり前

句にあたりて面白きこといふはかりな

し

竹林集

いく秋かへし桃をえし人

ふる宮のそのゝ朝かほ咲殘り　宗砌

前句は東方朔なるを源氏物語朝臣の齋

院にとりなされたり齋院は桃園式部卿

の姫宮こ此句は世々感心の句にて諸抄

に出たり實に奇妙の作とや申へき物な

り

同

花さく種を殘す朝かほ

遠き世のはるの桃園跡ふりて　賢盛

是も前におなし朝臣を桃園にせられて

こ此句春なれとも等類故爰に入いよ〳〵

おもしろき作し

下草

おもかけの殘る朝かほ花もなし

梢露けき桃園のあき　宗祇

是も又おもしろく附られたりいつれも

附方の約束違はさることよく思ふへし

五色連哥

誰うみ柿のこのみつらしも

さねこんの中に絶ぬ秋の霜　宗徹

柿にさねこんのこと葉をおもしろく附

られたりさねこんは重ね来んこ

寶德千句

嫌破るらん芭蕉ふく風

仙人のきるや雄鹿の皮衣　宗砌

嫌やふるらんと皮衣を附はせを葉に鹿

は蕉鹿の故事こ奇妙いふ斗なし

素眠筆連歌　順

作れは竹やうとなるらん

かくてもろ田中の庵の前うしろ　眠

うといふに前後を附て竹をとしなし田

をもろと近せられたる十分の作意一句
の上もことにおもしろくやすらかし

草庵千句　恵俊

いときなきまてなれる身の果
秋ふかき山田のひつち青やかに　宗祇

前句の見かへいときなきといふに稂め
つらしき作意なり

三島千句

是そ此西より来たる法の座
庭の植木の色かへぬかけ　宗祇

いかん祖師西来意庭前の柏樹子し
法といふに植木と附色の字よく入たる
物し

大原三吟

西よりきたる法の座かは
色かへぬうへ木のかけは静にて　宗長

前におなし附かた作意面白し

十花千句　宗長

たくひなくひかるかたちに生立て
池のうへ木も皆法の庭　宗仲

是は前句ていかる源氏と夫を法に見かへ
てひかろうへ木と附られ生立てといふ
にもよきみかへなり此附句秋ならねと
も同等の附方規律見やすからんかたち
爰に入いつれも附こゝろ遣はさる事か
くのごとし

古写本の中

こゝろ付けよ文字のことはり

人毎の愁とあきや成めらん　思碧

文字にこゝ付けよといふに秋の心文字
のことはり面白くや

寶徳千句　満綱

思ひは上に三重の下帯

雲霞霧につらなる鳥鳴て　宇砌

三重といふに衣物を三つとり出して雁
のつらなりたる様帯として附られたる
面白し後に帯ひきすて、内ろ雁かねな
とゝ兼我もせられし園塵集にあり

十躰抄の中

山かけめくる加茂の河水

鵲のこの橋本れ木におりて　智薀

めくるといふに鵲は附もの」前句加茂の山なれは橋本の宮の心にて附られたり一句はしはしの本の木なり鵲のとめくりてとりたるけしき見るやうなり秋ならわとも爰に入

専順発句の中　道貧

時雨も霧もめくるむら雲

残る夜の月の笠鷺声更て　紙阿

附こゝろは聞えたる通りこむら雲に月のかさゝきとあつかはれたる面白し是も前句のめくるといふに附られたり

文安千句　専順

雲間より又差のぼる朝日かけ

めくれる空のかさゝきのこゑ　盛家

是も前句差といふに笠鷺と附られ一句にめくると迫出たり此句秋ならわとも等類故爰に入

発句花そころ　湖心

めくる日かけの落るかつらき

鵲の門の柳の木におりて　君誓

是もめくるに鵲なり葛城といふに柳と

とに面白し此句は春なれとも鵲の作例

爰に入

寶德千句　宗砌

いくめくり浮世の秋に逢ぬらん

ほしのわたりのかさゝきのはし　原秀

家集

是又めくるにかさゝきなり一句も面白

し附方のやくそく又こ見るへし

伽ろか雁の雲になくそら

琴の音もすみのほる夜の月更て　基佗

二十五弦夜月に彈せはの詩の心なり伽

ろかと　たるに妙なり

文安千句　宗砌

野田になく蛙そはしめ出の声

玉河白し水にすむ月　親當

野田の玉河にして蛙の句に水にすむと

いふこと葉をたち入られしそふかく心

を用ひし事見えたり

同　生巧

雲にやおくの松木ひくらん

月見れは空に梓のちはりて　日晟

梓のそまにして一句面白し

春夢坊

ふくろもしろき秋の衣手

声〳〵にむしいまはたをりたえて　牡丹花

附心ははたをり出にしていまはたのこ

とは面白し

雨吟の中　宗祇

草結ふまての月を又やみん

やとれは萩もわたる秋の野　宗伊

旅人の野宿をれは萩もねたるとしけし

き見るやうなり萩の寝たる事哥にも稀

に聞ゆれとめつらし

宗祇草庵千句　経安

寝よとや月のかけも傾く

小萩原重けに露の置そひて　惠俊

是も萩の寝たるに置そふる露けしき見

るやうに附られたり

文安千句　　日晟成

なるてふ栗やかけに落らむ　　宗砌

えそみえぬ笑の中なる秋の霜

前句陰に落てと有故えそみえぬと出栗

に笑のうちなる釵の事にしてなりされ

と秋の二句あ故つるきを秋の霜にて閑

かせられたるとみえたり前句に一字も

のかす例の縦横自在なる作し

花そころの中　　原春

笑の中には何思ふらむ

うへ置し軒のいか栗なりそめて　　宗松

是亦笑に栗なりいか栗めつらし

独吟の中

葛の葉のかこふはかりの草の庵　　堯空

玉まき敬す露のあさちふ

玉まく葛にしてし巻を蒔にして一句た

つた下の及慶にあらす

竹林集

年しる屋はないつこ、のつ

梶をとり菊をつむ日の秋ことに　　宗砌

前句の七星九星を七日九日に見かへて
梶も菊も星の縁あれは七月七日九月九
日にして附られたる粉骨几帳の及へき
にあらす附句に日の字伐入られたるに
てよく聞ゆる慶ふかくおも寄られたり
此めしの依には幾度も耳を驚かしめ

家集

いつの間に柄の色と成ぬらん　基佗
岩根の葛の生のふるかけ
前句はいつの間に紅葉したるといふを
岩にはふ葛を附てよく聞えぬるを猶お
ひのほろと近あるにて柄の色つきたる
やうに見せられたる一句のしたて自在
なり

名殿連哥の中

一夏籠る寺ふりにけり
是やこのはつとや出しの高雄山　宗砌
一夏こもるといふ尺教の句を鷹にはか
へて秋の鳥屋出しを附られ高雄に鷹伐
かけて寺といふに寄せし事又たくひあ

ろましくこそ

淺間千句

岩根は苔の延をそしく

松にちる葛は端さす唐錦　宗長

苔のむしろといふを錦もてはしをさし

たるとつけられたり端さすの言葉めつら

し愚句にも數〳〵いたせり

徽書記草根集

山の名のこまの錦の端さすや苔のむ

しろの四方の紅葉、

春夢草の中

吹つたひ花やはしさす唐錦　牡丹花

此外にもあまたあるへし

賢盛

紅そころの中

松たてる柄の秋の色さひて

賤か刀そ紅葉をもきる　宗砌

前のさひてに刀杉にあたりて紅葉をも

伐と附られたる一句も凡慮の外にして

面白し

名所連哥の中

枕につらき秋かせの聲

わか宿は不破の関かと月をみて　宗長

荒にし後は只秋のかせの哥にて附られたるもさるを一句に着るともいはすゝ破の関かと見たる月餘情ふかし

竹林集

心ほそきは老か身の秋

758

袍なくの空に欠ゆく月を見て　能阿

老の句にかけゆく月を附られ心ほそきにいよく面白しわれも老境に入しよりこの句を見ることにことさら感慨のもの

延徳連哥　恵俊

秋もいまはのころのあはれさ

かけゆくを月も齢の末と見て　賢仲

是又かけゆく月と前句いまはといふにあたりて齢の末いかにも面白し秋もいまは〻今陰暮秋〻

明應千句　紹永

秋のこよひの宿ことの月

住よしや演劇の市の假屋形　專順

こよひの宿ことしいふを九月十三夜に
して住よしの市を附られたり市の假屋
は常し假屋形めつらし

冬

園塵集

ふりにし俤の文の一筆　兼載

玉笹にまた朝霜の落やらて
前句の文を玉笹に附たる文にしてなり

ふりにしといふによりて霜と面白し

萱草

こゝろは空にかけるとそ聞
風はけしいまや旅たつ神無月　宗祇

前句空かけるといふによりて神〳〵の
出雲に旅たち給ふとせられし事めつら
し

自連哥会

人け稀なるふる宮の庭
神は皆旅たつ山に冬のきて　宗長

足きた神のたひ立し人は稀なるに面白し

鷹仁獨吟

ふむや砂は浩の跡あり

飛鳥井雅親

ふりしける汀の雪に鴨おりて

前句の浩の跡を鴨に見たてゝし水鳥を

脱置浩とよみたる哥あまたあり面白し

鷹百韵の中

二條良基公

錦をみすろ鷹の鈴もち

ほ狩人帽子姿に出たちて

前句錦とあるにほうしを附られたり鷹

人は錦の帽子きるよし又荒灯尾たか百

貂にも糸萩といふ前句に鈴もちか鷹の

ゆすほの唐にしきとあり帽子姿見るや

う也

同

鷹かひの山たちこめて降雪に

あしたかいまたくらき横雲

良基公

朝かと附られたるに愛鷹をかけて前句

の山に附させられたり愛鷹山はふるく

たかを放たれたるよりの名し雪の明か

かたのけしき見る　やうにて足下の物に
あらず

明應千句

埋みし箱にのこる残れる　賢盛

誰こえて伊豆の高根のけさの雪

埋みしといふに雪は聞えたる面りし附句
に根の字を入て箱根路を誰越て出とせら
れたるいと工なり

竹林集

杉の木の間に雪をみえたる

2896

明わたる横河の遠の比良の山　山歌
附こゝろは杉に横河雪にひらしされと
杉に雪を結ひたる此前句は常に有へき
事なるを雪をみえたるといふこと葉に
あたりて横川よりひらの雪と遠く見た
るとの作意粉骨の程大かたに思ふへか
らす言外の妙といふへく此附句により
て前句まてし一しほ面白く聞ゆるなり
此句発なれとも爰に入

明應本式

友とやきかん千鳥啼なり

山かけの雲のかへるさ舟着て　宗祇

附心は王子獻載安道をたつねて奥を山陰を物る句し友とやきかんとあるを

よくあつかはれたる也作意やすらかにして心ふかし

竹林集

海の上なる遠山のかけ　専順

あさもよひきのふ見さりし雲ふりて

前句の遠山といふに紀の海を下心に附られたる也あさをよひきのふといふに

心を附て見るへし海の上なる紀路の遠山なり

菅草

車引三のみをおもふ花

ゆくなこり大みの宿の雪の日に　宗祇

前句は三車火たくの心也附る處は源氏

明石の姫君を三歳まて大みのさとに置

給ひしことにしてとりなし工なり

花そころの中　利在

うちむれてゆく鶴の声〳〵

玉江

なれやおなし雪野のはなれ駒　宗砌

前句の鶴の声〳〵を名所つるふちの駒に

とりなされたりつるふちは信濃小笠原

の牧　せはなれ駒又出たり

山石集

不二の山雪のはかまをきたるかな　小法師

雪のかたひらうちかつきつゝ

附こゝろは聞えたる通りこ惟子雪は常

にいふことなから袴をいふに雪のかた

ひら面白し

発句こゝろそときの中

かたひら雪はわか袖の色　宗祇

ならす牛の角に凡を猶まちて

是は前句のかたひら雪をあふきに見て

附られたる面白しや附句は夏なれとも

惟子雪の前句故爰に入

竹林集

凡帳の裏に見ゆる人かけ

白たへのかたひら雪に戸を明て　宗砌

是ゆかたひら雪し凡帳にかたひらと出たる面白し

同

やかてかくかはろへきとは思ひきや　心敬

雪ふみわくる小野の山かけ

前句は愛宕し夫を伊勢物語業平の雪ふみわけて君を見んとはの哥にてをの、雪を附られ前句のおもひきやといふにかたりてせん尤廣の外の作意也わすれてはゆかとそおもふ思ひきやとあり

俊渡に殘りたる雪傳連哥　宗砌

見わたせは波に虹たつあさかすみ

朝影さむしむかふ雪の日　行助

虹に雪のはれ間の日かけを思ひ寄られたることとめつらし此の虹雪のあしたの実景見るやうし

園塵集

横をれる山はさたかにあらはれて　義敦

雪にはれたる空の吳竹

前句は横とりふせるさよの中山し夫を

雪折の竹に見かへて窓よりさたかに見
えたる山にしてし一句やすらかにして
附て、ふかく又し妙也

竹林集

をのれひとりと松はふりけり

同

橘に積れる雪を打はらい　專順

ひとりとしへたる松といふを源氏ひた
ちの姫宮の庭にとりなされて橘の雪を
はらひたる附合なる物し

1308

1318

繪にかける雪の芭蕉葉枯やらて　行助

前句いつはりといふに雪のはせを葉め
つらしく附られたり唐詩といふ人雪の
芭蕉を画きし故事し

いつはりなからあはれとやみん

同

水もさひしき故さとの池

1156

猿さはき奈良の葉おつる山の陰　賢盛

故郷の池といふを南都さる澤の池にし
て一句の仕立考明し是は詰物に載たる

名句し

十花千句　聽雪

四伽たてまつる寺の行ひ

折敷すしみちの枝葉数くに　宗長

あかといふを紅葉の色にして一句面白し

名慶連号の中

甲斐かね高みかせやふくらむ

鳴鶴の氷にわふる声ふけて　宗祇

前句の鶴を甲州都留の郡にしてし曲節

自在とやいふへき

古写本の中

落すなみたも宿やなからむ

枕かる猪名の笹原名枯て　心敬

前句のなみたも宿やなからんといふに

思ひもかけぬみなのさゝはらを旅にし

て附られたる面白し

しなかとりみな野をゆけは有馬山夕

きりたちぬ宿はなくしての号し

萱草

かくことの葉の跡の墨きえ

埋火の灰の手すさびしけき夜に　宗祇

前句の墨汚を炭に見かへてかくといふにも面白し

花をころの中　吉理

遠山からすいつちゆくらむ

炭やきの頭は白くとしたて　宗砌

遠山鳥に炭焼人の頭も白しと附られたる奇妙とやいふへき山鳥頭も白くなると、あり庵主物かたり釋增基能野紀行に山鳥頭も白くなにけり我功ろへきと

きやきめらむ

三しま千句

雪にけふりのしろき炭かま

黒みたる鬼か髪は白妙に　宗祇

是又附方前におなし約束し一句面白し

独吟千句

霜はらふ朝露けき朝からす

いつのほとにか髪しろくなる　蕉翁

是また前におなし霜はらふ鳥にかみ白くなる老人の附方なり

園塵集

見なれぬ鳥の物ろ山もと

空寒み雪をつはさの夕からす　蛍哉

是は夕鴉の雪に物ろにして見なれぬ鳥

といふを面白く附られたる也雪をつは

さといふ作意他の及なき處し

寶德千句　俊喬

辺ろふもとの炭の小車

ひく雪は横山のはの明ろ夜に　專順

前句の炭車にひくと出て一句は横雪し

炭かまの名ろ横山炭にとりなされたろ

粉骨面白し

新六帖定俊

何としてしがらやけはかいつみなる横山炭のしろくなるらん

独吟

炭やくけふりのほろ一すち

明わたる雪の横山静にて

是又炭に横山一句は横雪なり附方の規

律又こ見るへし

家集

名のみなりけりをのゝ山里

誰宿も閨に炭やく冬の衣に　心敬

前句の名のみなりけりをおもしろくと
りなされたり誰宿も炭おこす冬の衣を
閨にすみやくとの句作にて小野の炭か
まは名のみしと聞ゆることゝやいは
んゆとやいはむ

園塵集

心しらるゝ哥の一ふし

寒きにの芦の枯葉に風を見て　兼載

前句哥の一ふしといふを芦の葉にさゆ
るかせのふくをみてさやく音を聞たる
とし一句仕立めつらし

文安千句　親尚

ちらさはつらし文の上かき

萩かえや枯葉の霜を吹かせに　忍誓

是又萩につけたる文にして上かきとい
ふに面白し

下草

都にはうつらん物を旅衣

夕霜はらふやまの寒けさ　宗祇

都にはいまや衣をうつの山の哥にしてたてられ夕霧はらふ山とはかりせられたる處に餘情あり

猪吟

いかりをなせるこゝろ愚かさ
梓弓野のふす猪通れめや　兼載

前句の忍をいかり猪にみかへぬるは常のことなから附句の仕たて格別の物なり

萱草

御鳴たつ山の暮かたの野をせはみ伺狩の人のさはく日に　宗祇

前句の千鳥を人にかりたてられて千鳥の鳥のたつことにしてなり野をせはみの初五文字ことに面白し

前句附の中

雲に鳴尾の爪のはけしさ
はし鷹をまの野にしけき鈴の音　心敬

名所の鳴尾を鷹の結にして烈しきかせに殘る處なく聞ゆるし

草庵の千句　宗友

うらなへる人にまかする身のゆくゑ　恵俊

遠き狩場もふみはまよはし

前句のうらなひを文王のかりして呂望をともなひ狩ひしことにしたて、

こ工なる附こゝろし

家集

二人のかけの見ゆる小車　基佐

狩場にやけた物もなく暮ぬらん

是もまた文王大公望を同車のことにと

りなし二人のかけといふ恋句をひき遠へて附ふおもしろし

古写本の中

おなし假寢の枕する人　宗砌

夜つなく鹿いくもとそ泊山

前句のおなし假寢の旅を泊り狩に鹿とおなし假寢にしてたかいくもとなとめつらし附句は春なれとも次の等類故爰に入

花そころの中

すゝめむらかる日こそ空けれ

第鷹をとほとにつなく暮つかた　賢盛

とほこは小架とかきたれることのよし鷹をやすむるとまり木しめつらしき作意すゝめにもよく寄合て夕暮の狩のけしきあはれにおもしろし

獨吟たてなからの中

けふも残らぬ野は梓弓

大かりのひきつれ鷹を手に出えて　宗碩

附こゝろは聞えたる直りなり犬飼の名

1268

目めつらし

竹林集

うかるゝ玉や空にきえなん

さやかなる夕日のもとの横霞　宗砌

前句は高にて玉のうかるゝといふを見かへて空に消なんといふに夕日の横あられめつらしく自立なる句作し

園塵集

音にのみ聞　石敷の中

閨寒みあられはしりて深き夜に　兼載

前句は禁中のことは音にのみ聞まてな
りとといふをあられはしりの音にして
寒夜の霰をさりけなく附られたる面白
きこと又たくひあるましくや

獨吟千句

敷の瀧やこほりとくらむ
燈たくかけも夜ふかき貴舟川　宗牧
つゝみの瀧を神楽の敷にとりなして度
火を出されこほりとくらむに面白し

寶德千句　来阿

冰の上にたてる白鷺
寒き日にとけてはいかゝ眠るへき　宗砌

是は前句の冰にとけてと縁語して附
られたりいかゝ眠るへきは人倫の上こ
されは用附に依てよく一句立たういま
かゝる句を用附とのみ心得たる族多し
連歌はかくのことき境に面白みある
ことをしらす一向にうしろ附噂附なと
、壺中の説を立て先達の句こ粉骨せら
れしをよく味ひ足る人なし歎くへし又

笑ふへし

獨吟天の戸をの中

かけ懸き水の山田のうす氷

只ひたふるにとけしとそする　宗祇

是また氷の縁詰をもて田にひたふると

いふこと葉を入て意を附られたり所謂

用附を過れて一句しかも面白く聞ゆる

し是はその句なりはとも同等の作例又

やすき方に爰に入

宝徳千句　宗砌

くむ谷水に氷柱みるころ

うちとけぬこゝろや袖をぬらすらむ　忍誓

是も前のごとくつらゝにとくるといふ

こと葉を入て意し色なりはとも爰に入

浅間千句

さえこほる水も三色の程哉

とけぬこゝろやたくみなからん　宗長

是も前にいふ通りし氷は三色はかり

なるに人のこゝろのとけぬはたくへな

き物としいつれも用附に依てよくのか

れたる附方の仏壇是にて仏得へし是も
悪なれと爰に入

十花千句　宗碩

心をけため栖あはれさ
芦火たき焼かき拂ふ年暮て　麦宜
附こゝろは聞えたる面りしすゝかき拂
ふめつらし　草枯集　乙徹
家人にはら云捨るをあやにくに空もすゝけて恢る雲かな
是も焼拂の哥せ
然野千句　常安

やすらゐけりな美濃の中庄
末ちかき年の終りを惜む日に　尋順
美濃に尾張面白く附られたり
花そころの中　重政
芦の屋に焼火は寒くほのみえて
なやらふ夜はにそらは暮けり　宗砌
芦の屋をあしの笛に見かへてし附句稿
にして上手の物こ
独吟
仏るもしろき芦の屋の庄

明めるか夜はになやらふ年の暮　宗祇

芦の屋の足かへ前におなし物るといふ
にとしと附られたり芦の屋の足かへい
つれも規律ある事かくのことし

文安千句　直清

ふりぬる宮ゐ上久にけり
鈴ならす神乗男は篇にて　宗砌
ふりぬるに鈴上久に篇と出かくら男め
つらし

恋

独吟千句

いく重とも沒こそ氷れ諏訪の海
とくるこゝろや神にまかせん　兼載

是も張にとくると人の心にして附られ
たるにて用附にあらす諏訪の氷を恋に
足かへられたるいと面白し是をも心な
く見過さは用附しといふへし附方の法
則ゐしきこと純足るへし前の冬の部氷
の四句と附かたの心もちい符節を合た

ろかことし

文安千句　日晟

髪白くして物あはれなり

かたみともなるやかきをく筆の跡　直清

髪を紙にとりなして物あはれといふに

記念し芳野の附とやいはん

明應千句　紹永

夢ぢ西にかくるゆく末

思はすようき中ゐのかたゝかへ　專順

一句は源氏空せみの尾中ゐのかたゝか

た、かへ面白し中ゐは部の面也

同　專順

雨そゝきいとはぬ袖の涼しきに

きませまつ夜のあつまやの声　師円

雨そゝきに東屋と出たり俤馬乗のうた

ひ物にあり

園塵集

くるかと思ひ胸をくるしき

まれにあふ夜はに迎のなくもかな　義成

前句は人のくるかとまつかくるしきを

ひき遠へてわかれの近のくるかと思ふ
にしてしむかへのくるといふこと葉め
つらし

同

わかいつはらめ程をあはれめ
袖にのみなみたの玉の枝折て　重茂

前句のいつはらめを竹取物語にして玉
の枝しなみたの玉とりなし又たくひあ
るましくや

寶徳千句　忍誉

包む名もかくては世にも洩てまし
笹の末葉につけし玉つさ　宗柳

是も世にといふを笹の葉の文こ附こ、
ろ面白し

大永千句　順哲

忍ふとや思ふかゝれやはある
してやつす面ひに蓑をひき懸て　宗長

かくれやはあるに隠れ蓑にしておもし
ろし

行助発句他渡國に傳りたる連哥

見るめもうしと漕ぐ笠の端
思なるわが身をいまはかくしきて　土說
是は隠れ笠にしてし就なれとも妄に入

享録独吟

さして来んたは笠をも行かせん
さてもかくれぬ紅はたちぬとも　宗長
是もかくれ笠にしてし

独吟

笠もかなあはれ時雨や空の雲
落るなみたは袖もかくさす　基佐

是またかくれ笠にしてし

永正連歌　宗信

袖には面のをやみなき頃
つらきにもかくれ簑をはいかゝせん　宗長
是も袖の涙に隠れ簑の名目を附られた
りいつれも附かたの約束し

古写本の中

髪白くなることをかなしき
きぬ〳〵の妻戸の障子明る夜に　玉名
是亦髪を紙に見かへてしきぬ〳〵の妻

戸なとけしき見るやうに面白し

永西千句　宗碩

妹にけさ八重ふる霜のおき別れ

うらみかきやる水茎の岡　暗雪

附心は後朝の文なとにして霜に水茎の

岡出たり　みつくきの岡の屋形にいも

とあれと寝ての朝明の霜のふりはもの

哥し

寛正連哥　専順

水茎や昔の跡を殘すらん

寝てのあしたの夢もわすれす　能阿

是も昔の跡に夢と出水くきの岡前の哥

の心もて面白し

住吉千句　尭空

恋しなは石に成ても忘れめや

手をゆるさすは色期もなき　宗碩

前句恋死なはも石も模の銀によりて色

期に君をもたせて面白し

同　宗碩

かつ見なからも飽期やはある

斧の柄もおもふか中に朽めへし　麦空

是も前の翌を模に尺かへて高句に斧の
柄を久しきことにとりなし給ふ附かた
凡庸の外の作し

寶徳千句　宗長

谷のそこにて老をかなしき

いまはとてなけも捨へき身の向後　牡丹花

谷に身をなくるとつけられたり谷の附
物慌にして面白し

大永千句　宗長

とは、やみかき谷の戸のあ
うきたひに身はなけつとも惜まめや　宗碩

是も谷に身なけんとし

山家独吟

なけく身は捨ぬしもこそ哀なれ

恨のはてやたゝみかき谷　宗長

是も谷に身をなけはやとし附かたの約
東又忍るへし

永正千句　三大

金人あはしのゆふあけとふ暮

はかなさはわかれしけさの夢語り　宗及

夢の口をあはするにして逢んあはしに
ひたとつくゝ夢かたりめつらし

雪順発句連歌

とはゝやさらは道のつまむき
これを此うらのまさしき辻やしろ　雪順

道辻にしてこ前句とはゝやといひつ
まむきとあるによき附ものなるへし
つまむきはたのゆくゑし

家集

荻のほのかにあけそめぬる
玉つさにまつうきことの一くたり　基佐
是は荻につけたる文こ明そめぬるに
玉章面白し

狂歌和号連哥

結ひとけとや露こほろらむ
淺はかの荻の上葉やかりの文　宗長
是も結ふとゝふ前句に荻の葉につけた
る文にしてこ面白し

連集良材の中

老たる松のかせのさびしさ
胞さはくよるの枕の夢さめて　心敬

丁固の胞に松の生たる夢の故事にとり
なぞらへて老を生の足かゝ工し

他渡本　獨吟恋連哥

まちてくるしき島の出いり
松原を胞のけふりのたくひにて　宗砌
前句の島をいきの松原にして胞のけふ
りをあつかはれたる工にして例の自を
なる作意）

家集

ふきまよふいきの松かせ身に入て　心敬
草かり笛の暮る山ぢ

これは前のいきの松原を草苅の息に足
かへて一句軽くとつけられたる上手の
物こゝろならねと心爰に入

十躰和歌の中

出るより入山中の月　教條
さをしかのいきかと足えし霧はれて
是亦月の出入をいきにしてし一句面白

秋なれとも炎に入

文安連哥　當

おきてみつから結ふ暁

色つらき花田の帯のきぬ〳〵に　宗砌

前句は尺教のあかなるを恋に尺かへて

一句のしたて寄ぬし

文安千句　自筆

心をとはぬ思ひはなし

色ことはかた足うらをふみ重て　宗砌

是またいとふに足トを附ら

れ序足うら珍らし

専順発句千句　宗祇

何ならぬ名をは人にも結ぶめや

恋をなけきのまつ寢をそする　専順

紅葉に木の丸殿は常のことしかるを

こと葉に霞めて短句にていひはたされ

たる手きは又耳を驚して面白きてとい

ふはかりなし

竹林集

竹の末葉はなひくとそ見る

世をしらぬ人の心はおれふさて　宗砌

前句にあたりて人の心のおれぬとせら
れたる工の物し世をしらぬ人は物のあ
はれもしらしとし宴ぬし

下葉

恨みのはては又を高き
つれなさをわかいひ〳〵のひとりねに　宗祇
世中をかくいひ〳〵のはて〳〵はいか
にやいかにならんとすらむ　の歌にて前
句のはてといふをよく押へられたるこ

と思ひよらさる處し

蕉翁作らす花橘の中

うらさびしくもゆる夕暮　名

まちえてもいつ一筆の文はうし

うらさびしきは心さびしきし夫を一筆
の文はことすくなにて紙の裏さびしき
との乃かへむ工し

家集

神をを漢む日本の図

みちのくや思ふ程をはかきやりて　基佗

是は神を爺に見かへてなりみちのくと
出たるにてみちのく紙よく字ゆるなり
思ふほとをかきやちはみちのくのいは
て思ふはえそしらぬの哥のことかきを
とりての一句のしたて工にして物骨せ
られし慶惱に見えて面白し

永田恵哥　宇治

便ありても疎きとそ見る

中〳〵のゆかりむつひは何ならて　言清
ゆかりむつひは歌筵のいもせ中し前句

便ありてもとある故中〳〵のゆかりむ
つひめつらしき附こゝろし恵哥はさま
〳〵の物を野へ思て前句に隨ひてとり
出すこと肝要し

前句附

何こともむかへる壁に破らはや　口教
聞耳くるし思ふ玉つさ
前句は尼教面壁の句なりやふらはやに
思ふ文かへに耳こ面白き附かたと申へ
き

荻草

小萩うつろふ色を物うき
玉河をなみたくたくる袖にて　宗祇
前句移ろふといふより袖の涙を思ひよ
られ萩に玉ゐのとりなし自立にして面
白きこといふへからす

熊野千句　行助

簾に萩の露そこほる、
すきかへす文やなみたにぬれぬらん　専順
是亦萩に文簾に老色すのことはおもし

ろし

鶏吟

清き清に雁の鳴こゑ
露の間を君とまれとも いはまほし　党空
さいふなみひまなくきしをあらふめり
なきさ清くは君とまれとか　大伴の黒
主の歌し是にて雁を附させられたる又
凡慮の及さる處なり

猫吟千句

ゆふへや雁のつかひ成らん

文も見ぬ萩の枯葉に爪かきて　　董我

是又萩に文と面白し

花そこの中　宗祇

へたつる中の秋はうらめし

にくまるゝ芦のほわたの恋衣　　雪仏

へたつる中といふを関子鷺の故事にて

芦のほわたは男ひよるへきことも有へ

きを恋衣ににくまるゝとなされし

はれ鷺の処しらとやいはん

家集

為へはなみた水もひにけり

筆の跡は硯に塵のみて　　基佐

水もひにけりといふに硯の塵を附一筆

の跡にて恋をもちたる牛隔格別の作意し

安養寺千句　　不政

われにのみやはかくもつれなき

こりすしも男ふつらさや恋ならむ　　宗祇

つれなきとつらさの句かはるおもむき

此句にてよく辨ふへきしつれなきはう

きつらきとは別の事也難面強面とかき

てつれなきことよく聞えたり

長亨連哥　青柏

ふりにし雲顕れにけり

雪ふかき夜はの巧みき踏てて　政春

前句の題を意をきめ〳〵にとりなし

巧みとはかりいひて意しあらはるゝに

跡見えと附たる面白し

文安連歌　宗祇

夢さそふ野守のかゝりに春暮て

かへるあしたを霞さへうき　祇

是亦巧みたにて意し附る愛はけるの巧みにしてし

明應連哥　紹永

雁のみる芦の葉の形なりき

かへる空には何さはらまし　雪順

是亦前句のはるの雁に巧みとせられ芦

にさはらぬと出一句は意し面白し

古今和の中

鳥かぶ音をまちてこそ見め

ふけぬ間に巧れとふを聞侍て　基佐

是非仰れといふにて意と同様ての作意
めつらしく工也　仰るといふ言葉にて意の
句作いつれも約束通はさる附こゝろなり

家集

にいわれかうそいかゝ恨みん　基佐

きゝ〳〵の宿に千鶴の鳥鳴て
前句われかうといふにあたりて千鶴の
鳥めつらしいかゝ恨みんほも妙し

韵字狙吟
ひくやいかたは波にしたかふ

まつに寿を墓をなつみを人こゝろ　正徹
筏に巻は樽木にして〻れを友積そと
いふこと巻前句にあたりて奇なる作意
なり

家集

面かけするさとをとはゝや
やせ黒むたくひやはある物和歌　基佐
前句面かけすに痩黒むとは八瀬の里に
しての　そなし　附かた自在にしておも
しろし

竹林集

わかれても又逢坂をたのむ身に　賢覺

1654

梯さす髪のあかすともしれ

わかれの梯にとりなし梯さすのこと系

めづらし差橋とは常にある言系し髪の

坂と迄かけられたること系のつゝきナ

分なる附句たゝし

素眠筆　時代しらす　侍

鱗うかふ秋の江淡

うけれとも君にのはつなかれて　素眠

是は江淡といふを名所淡路にして繋き

鯉を附られたるし恵を鯉ととりてしわ

か恵は淡の生涯のつなき鯉身をけたしま

かせやはするの哥なり　素眠自筆懐紙に

ある附句にて工なること物骨易ふへし

化渡本　狂吟

恵の淡かと又ゆる淡路

はなれえぬ人思ひにつなかれて　宇砌

是亦前の歌もてこと系はかりにて繋き

鯉を附られたり面白き事いふはかりなし

雜

萱草

遠にとふや泉なるらむ

松人の斧にくたくる木は散て　宗祇

前句の泉をいつみの松にして杏に花と

あるより斧にくたけし木し面白し

文安千句　宗砌

雪ふかき松山人の假屋形

雲の美尾より芳名岳の回　日晨

是は美尾のそまにしてし假やかたに回

と出たり十分なる物こ

回　直勝

松人に此山そのこそ、はん　日晨

筏士なれやさしいつみは

是亦泉の松にしてし差いつみはのこと

茶自至に面白し

明應千句　紹永

そま山もいれはあさくやなりぬらん

ひくやあつさの弓も音すゑ　宗祇

是も梓の松にしてこ入れはといふにひ

くやとまて出たり　松の附かたさま〳〵
心かはりて約束は遠はさる事又〳〵よ
く見るへし

牡吟山家連歌

瀬〳〵に数そふ松川の暮　宗長

五月雨に杉木の山いつはれん

是も杉木の松にしてし松の句に暮といふは椙木の事し古歌にも古連歌にもあ
また有りの句を附て見るへし

熊野千句　勝之

法の師をたつねて分る山の奥　盛長
おろすそま木せ筏成らむ

前句法の師を尋るとしふに筏を組ことにして筏師に見かへられたることめつらしく面白し

十躰和歌の中

人の数こそあまた見えけれ　教藤
松木ひく正木の綱に手を懸て
おもしろき附こゝろし つなに手を懸て
の作意奇妙にして人あまたこそりたろ

さま見るやうし

古写本の中

いかはかりさて遠くきぬらむ

さきの世は覚えぬ旅の道なれや　行助

いかゝさて遠きといふに奇めの句作せられし物と生れぬさきの旅誕もしらさる事おもしろきゝ又かへなり

竹林集

はやくのことを思ふあかつき

わたりせん河音高し夜の雨　專順

前句はやくのことはさのことをおもふ心夫を夜の雨に水まさらぬ程にはやく何をわたらむと附られたる作意工し旅とも宿とも心はすして旅情面白し

草庵千句　兼載

袖ひやゝかにふくるは音

いそかはや逸けきたの歩わたり　惠林

是又前におなし附こゝろしふくるは音とりふに歩渡りを急く旅附かたの規律かはらす一句も面白し

薄花櫻の中

捨にし世をやわすれさるらむ

折〳〵に袖ひき直す墨衣　兼我

是は捨し世をわすれぬといふに袖ひき

つくろふ墨衣を附られたるにてうき世

に心の殘りたるさま見ゆるしひき直すの

ことはめつらし附心も被群のものとや

いふへし

明應千句　紹永

方遠へせし空明にけり

里と見てゆけは狐の火も消ぬ　宗祇

前のかたゝかへをきつねにはかられた

るにそなしされて一句の作意十分の

物し

竹林集

まよはぬ法の灯もかな

きつねなくたの末野に寺みえて　宗砌

又ともし火をいふにきつねこまよはぬ

とりふにおもしろく一句も考めし

同

2344

聞つることを見ることゝちする

かきならす此あつまやに夢覚て　宗砂

聞つることを琴に見かえて東屋と出て

一句奇めし

2346

同

むせふそ涙袖に押へし

ひく琵琶の音ほろ〳〵と手になりて　宗砂

むせふなみたをさへしといふに琵琶

を附られ一句のしたてひわをかゝへゐ

る人爰にあるかことし

両吟千句　宗長

音にしらるゝ水の一すち

唐琴や波の結かけてしらふらん　宗碩

名所唐琴のうらにして一句面白し

明應千句　専順

はやき瀬は駒打わたすかたもなし

法になかれはあまたこそあれ　宗祇

のりといふをこまに足かへるは常の事

し駒に法と附られて一句も面白し

草庵千句　宗友

わたりの小舟人をこそまて
とりをも殘さはいかに法の庭　宗祇
是も舟にのりと附られ附心は佛の善く
濟度のことにして面白し

淺間千句

舟さし捨る河上のみち
わたさすはいつ迄空し法ならん　宗長
是も舟に法し附心も前におなしわたさ
すはいつ迄空しのこと葉面白し

河越千句　心敬

かつきの海　人のうかふ舟端
こゝろなき心を法の底なれや　道英
是も舟にのりしかつきの海人といふに
心のそこことに面白し

花そころの中　雪順

みきはの小舟つなや朽らん
法にひく心のなきはうき身にて　原春
是も舟に法しつなにひくと迄出て附心
面白し

又明應連歌に　玄清

牛のあゆみの遅きを車

もの言に心はひかまほし　宗純

是も車に法と附ひくとまて出たる面白し以上六句皆舟車を話にして附たり近き頃の一坐舟車駒馬の前句法と附れは毫厘にうしろ附用附杯といひて附句の意味も考すして是を嫌ふし連歌は附方によりてさま〳〵自至なる趣の有ことを知すして只琴柱に膠するの癖説をいふのみ是なけく〳〵きの甚しきことし

独吟

河水をめぐる、衣の手にくみて　芳化

荒く波入舟の沖中

是は前句の河水をうけて沖中はときかせたる物し水をくむといふに沖の舟与如し

明應千句　專順

男はすようきゆ江のかたゝかへ　宗祇

又風むかふ沖のはや船

是又男はすのかたゝかへを舟のゆく意の

かせにさそはれたるにしてやはり沖中
汐にとりなされたるいと工し

寶德千句

一みち白き沖のはなれ洲　　俊喬
遠さかる其中汐のあくる夜に

是又前の沖を中汐にしてし一みち白き
といふに面白し附句の中汐は恋にもひ
かるへき句なれと沖中汐の謎に爰に入
いつれも附方の約束遠はさる物し

面白千句　　宗長

いけるかきりやいはて止へき
聞わたるためしもくるし橋柱　　宗碩
いけるかきりといふをなからの橋の故
事にとりなされしことめつらし

竹林集

又孫のまくら君おもひやれ
かへり見るわか身ふる屋の宿直人　　宗祇
前句の恋のきみを大君に見かへて老人
のふる屋に又ねせんことをうちわひた
るにして宿直を附られたる句作面白し

大永千句　　鴨雲

思ひ入心もふかき窓の中　　宗碩

千尋の龍も見えつとはしれ

前句思ひ入心のふかきといふを真龍を見たる家読の故事葉公といふ人殆にこゝろさしふかゝりしかある時真龍かたちを見たるとし窓にもよく附られたり　後頼朝臣の恋の哥に口おしや雲ゐかくれにふす龍もおもふ人には見えける物をとあり

十花千句　　牡丹花

昔かたりにことものつゝかす

中はみな虫はむ双紙あはれにて　　宗長

前句のことも續かすといふに虫はむ雙紙を附られたる姫こ手にならす枕双帝の上にこそむかしかたりのゆめは見えけれの哥の心なり

花そゝろの中　　重政

いかり猪のとこにたまるはかるもにて

水くむ磯におろすはし舟　　日晟

いかりおを砕にえかへてそこにもかる
藻にも濁るといふにもよく附し
端舟めつらしはし舟はいま俗にいふて
んま舟の事し

家集

水くむ袖は猶そめれぬる
大ふねのかけのはし舟漕こえて　仙敬
又水くむといふ前にはし舟出たり一句
もおもしろく附かたのやくそくまたか
くのことし

十躰和物の中
いまこそ年はたちかへりけれ
老ぬれはいとけなかりし心にて　救渕
前句の立春をたちかへるといふをうけ
て老人のいとけなく成しと面白くとり
なされたり遠寄の移りゆく模様甘味い
ふはかりなし

心敬紀行の中
上篇にしたる簑をこそまけ
假そめの枕たにすき旅ねして　良阿

前句の差たる簑を枕にしたると附られ
たり上着めつらし

大永千句　宗長

ふるき史積宮のさかしさ

身のうきも真柴檜交佐菴に　宗碩

前句のつむといふを柴にして漢の朱買
臣にとりなされたりめつらし

明應千句　宗祇

賢き人は誰を継らん

唐國のあろしはひろく樗れて

附句は聞えたる通りこ誰を継らんとい
ふにめつらしくとりなされたり

熊野千句　常安

みむろの山のはろ秋の色

誰とても彼きしの日をわするなよ　宗長

前句の三室に岸と附春秋を彼岸にとり
なされたり色といふ秋紅葉にしてし
されはわするなと出たる工みにて面白
し

俊渡本　獨吟

彼きしに至りかたきや蜑小舟

泊瀬三室のやまの中を　宗砌

是は彼きしをみむろにして海人をふねはつせとうけたる作意奇妙の物なり又爰をさらてし至る彼岸といふ句に龍田より夫とみむろの花さかり此めしの作なり是は諸抄に載てあまわく人のしるわし

名所連哥の中

包む名も世に隠れなく成にけり

むかしなからのやまとことの葉　宗砌

千載集に入たる忠度の歌もてしたてられ前句の恐ふ意をやすく見かへられたり短句にて自在なること他の及ばすらす

一条殿内會連哥

飛鳥は常に弓影に驚きて

立まふ雲を虹の外なる　宗砌

弓かけに驚くといふ我虹に足かへられたりめつらし

家集

屏風に似たる山のかたはら

岩にたつ松は雲にかく海にて　心敬

前句はけはしき山の屏風に似たるといふをいはにたつとして松のすがたとまて屏風と絵の縁もてやすらかにつけられたる粉骨一字もゆるさゝる附方岩にたつ松気色えもいはれず

寛徳千句　忍誓

乱れ芦のひまあらかたに舟とめて

宗砌

棹を又とる舞の入あや

是は乱れ芦を足に足かへ舟中の管弦にして舟にさほをとると一字も残さずつけられたり棹をとる舞高麗楽にあるし

さほを又とるといふ又の字に力あり絶妙の附かたれ慮のおもひよらざる處こそ

宗碩

すゑよし千句

とは、やいかに紫のゆゑ

さそ友人こゝろ書しの旅のそ　光空

是また紫といふに筑紫を附られたり面

白し

自虚歌合

恋のたゝりとうちも結られす

結ほゝれ　宗碩

総角のより直ぬしし

前のたゝりは結切り糸を繰出す男し源

氏物語宇治総角の尾にあるこ仍而面白

春夢草

猶かたゐのこゝろくるしき

かゝるへき恋のたゝりの何なれや　牧舟花

是も前にあなしつけくゝるし恋なれと

も等類故爰に入

花そころの中　吉理

南のかせもあつき六月

一重なる衣の帯のかた結ひ　忍誓

是は南のかせといふを薫風にして記念

の帯を附られたり面白し

寶徳千句　聯歌

うたふ声乱れて酔る面に

鳥も八度の夜はのはなむけ　宗長

前のうたふ声乱れてを庭鳥にして八声

を八度にて聞かせて盃を送別にせられたり奇妙し

永百千句　宗長

富士に晴たる雪のあけぼの

作りては驚く庭の山高み　玄清

前句の不二を庭の筑山に見かへて下こゝろは雪の山を作りたるにしてなり附かたおもしろし

然野千句　道賢

としたけうちの神や守れる

嶺高み杖突坂の雄徳山　心敬

前句は武内大臣なるを何となく八幡山に附られたる面白し

唐仁独吟

ほのかにゆる神のみあかし

ふる史をよめは絶〳〵文字消て　栄雅

是又神を紙に見かへてみあかしにもよく附られたり

家集

佛を人の親と成めり

うた、ねといさむる寺の鐘鳴て　心敬

うた、ねをいさむるかねめつらしきつ

けかた自立なるとりなしし父母のおや

のいさむるうた、ねはの哥し

十躰秘抄

うた、ねよりの暁のゆめ

たらちねのいさめしらるゝ身の老て　智蘊

是また前の哥にてうた、寢に親のいさ

めし暁の夢といふに老の歎息句作奇妙し

寶德千句　龍忠

絶んそつらき灯のかけ

かきたつる玉の緒琴の音更て　忍誓

附こゝろは聞えたる通りなり灯により

てかきたつる琴の音おもしろし琴の句

を附るにもさま〳〵のこと葉を尋へ置

前句に應してとり出す故ふるきもあた

らしく聞ゆるはこの句作し

文安千句　日晟

ひくことときけは河上のこゑ

橋みえて行かた遠き鈴鹿山　玄幸

前句川上の琴といふによりて枯野といふ舟の木をもて琴を造りし日本紀の条にとりなし附られたり鈴鹿山橋板も琴に寄合し面白し

寶徳千句　忍誓

松風や眠りを覚す石の上

碁うち琴ひく人のさま〳〵　宗祇

松かせに琴石に棋は常の事こといへと

も附句の自在なること琴棋書画をたのしむ人のさま〳〵見るやうし

三島千句

のむ酒になを残さはや三の友　宗祇

遠き跡ある此はしの上

前句は琴詩酒の友こ夫を虎渓の三笑に

とりなされたる面白し

独吟名号虚亭

友に三あり謡景なる　宗長

打わさす橋をは過ぬやすらひに

是も三の友を虎渓の橋にとりなされた

り附心面白し

住吉千句　宗碩

つたへなきたのまゝ埋れて
水のなかれを四の緒の声　光室
傳へなきたを琴琵の古曲絶たることに
して流口の四のを、附られ給ひしこと
短句にてよく聞かせられたる物なり

連集良材の中

人の世はさをなくる間の程なれや　宗祇
すみしは夢か此壺の中
前句のさをなくる間は機織に梭を投る
事ひまなくはやきことし丈夫費長房仙
術を学ひて壺中に住て伺る時杖を立た
るを投れは龍となりしより杖を梓にと
りなし時の移る事にして附られたるし
いと工にして面白し

沙石集

波にかたふく弓はりの月
大魚をいるかと人や思ふらん　無名
附人おもしろし弓はりの月にいるかし

竹のあなたに鳥のなくし
ふしなから秋は明めるとしられけり　元名
是又面白く附たる物し

同

はるはもえ秋はこかるゝ竈山
霞も霧もけふりとそ見る　小性師
是も面白し此連哥を一首の哥にして諸
抄に出せり
佐渡國に残りたる法皇勅點應仁連哥
むらくゝ雲のなひく半天

剱こそ國をおさむる寶なれ　元名
前句を村雲の寶剱に見てとりなし附ら
れたりめつらし

熊野千句　宗祇

身を写繪の後も恥かし
黄金より名をは重くも思はすや　紹永
王昭君のとりなし附かた放れて面白し
手際格別の物し

古写本の中
はたちにたらて家を出けり

大海老をそなたへとての贈り物　左兎

前句は花山院御遊せし夫を古今誹諧歌に皆人は海の翁といふめれとまたはたちにもたらすそ有けるの哥にとりなして海老を附て一句の面白きことといふはかりなし花山法皇御遊せは十九の御年し送りたる海老も十九なれはせにたらてとよみたり

浅間千句

雲や只いまもひれふる山ならん

昇りし龍はしはし恐るし　宗長

前句は松浦さよひめなるを雲やとあるによりて龍を男ひようひれを玳瑁の鰭にして附こゝろめつらし

独吟

慶かゝ心のとまる物なれや

かた通りなる旅の宿〳〵　兼載

かた通りのことと業めつらし序通りはいつも馴たる宿しされはゝとまるへくや

住よし千句　竟空

黄金求めて面かく面かけ
うるはしき佛のはたへ仰き見よ　宗碩

是亦前句は玉眼君毛延壽の写繪し夫を
佛の肌に足かへられたる事工にして面
白し

独吟

落葉積れるきてるはらの里
夜もすがら雨きく扁明果て　兼載

前句は名所きてるはらの里を落葉とある
より桐の葉にしてつけられたり例のお

もしろき作意し

寶徳千句　専順

ふして願ふも彼國のそ
行ふもろこそはしめ六の時　宗砌

附こゝろは聞えたる通りしふしてもね
かふといふに出家の行ひ子よりはしま
ると附られたる奇妙し子にふし寅にお
きてとあり出家は子よりつとむる成心

熊野千句　常安

打嵐の石を打く人音

誰となく手をあらすにや咎ふらん　宗祇

前句の碁を面白くとりなしてつけられ

たり手を却くく人めつらし

佗州本　市狐吟

うつや碁におもはす時の移るらん

よるの鼓の声のかすかく

前句のうつといふに鼓時の移るにつゝ

子の聚くとあそはされたること孔慮

の外とや思ひ給られ侍る

古写本の中

後花園院御製

石の上にも世をそ厭へる

乱れ碁にわか生死のあるを見て　心敬

前句にあたりての物骨ぬし

十躰和抄の中

あらそへる心の焉ののり物に

勝たるかたのいさむみたれ碁　雪吹

足は棋の賭物をのり物ともいふにより

て心の焉は只心はかりにとりて焉には

いさむといふこと碁をあつかはれし手

隙号妙し

竹林集

花橘のうちかほるかけ

2352 仙人や碁に生死をわするらん　賢盛

是は橘中の仙にして又生死をおもしろく附られたり

2358 同

石をもつくすあまの羽衣　心敬

乱れ棋をうつ其間には劫有て

是は前句の棋の劫を石にて面白く又かへられたりいはほを石と自主にとりなされたり

一字露顕　狂雄

うつ波のいく重か限り奚の海　石徹

濱てふ石をひろふみたれ棋

是亦打といふにより棋をとり出されたり

濱てふ石めつらしくおもしろし

下葉

霞もひかりそはや移りゆく　宗祇

灯に明日の雨しろ夜は更て

ともしひの霞を見て明日の雨をしる

といふこと実景也句作り奇妙し

竹林集

弓箭にあまたしろことそある

2376

棟上に時日をとろは博士にて　宗砌

上棟に弓矢をとろことといまもかくのこ

としふろき事と見えたり棟上の吉辰を

はかせの撰ふことにして附かた希有の

作意なり

同

とはれしそかたはかりなる

2374

くたろ世はうらのはかせも稀にして　宗砌

前句の恋を占トの博士にしてとはれし

そのかたはかりなるにひたと附られた

り是亦作意めつらし

古写本

傳へきて授ろ法は只一人　徳大寺前左大臣

水の清きをそ、いたゝき

只ひとりといふを灌頂にしてよくきか

せられたりいたゝきと附られたるにて

惟成もし

草木の名獨吟

いはと柏や波たゝくらん

法の師は手をさへ結ふあかの水　西微

前句のたゝくに法の師の手と附られたり行ひには手をたゝき手を結ふと作意めつらしく奇妙

化渡本　李德連歌

廣き野に夕かけさそふ松みえて

ひまゆく駒そはむ草もなき　宗砌

前句の夕景さそふ松といふを便にして

男ひもよらぬひま行こまをとり出されおもしろくとりなして堅横自在またたくひなし

家集

また見ぬ山にかくれすむ人

故さとは蓬か島とあれはてゝ　基佐

また見ぬ山といふに蓬か嶋と一句故里を蓬か島かとせられし又奇妙の作意し故郷の蓬生更に蓬か島成へし

明應千句　宗祇

遠しまのすかたを池に顕はして
庭の蓮に葉をそとる　永兼

前句の遠島を蓮葉にして蓮と附庭のよ
もきに葉をとるとの句作めつらしく面
白きことと又いふはかりなし附かた故郷
の蓮か島と同等し

韵字独吟

白と黒との石の乱れ碁　玉徽
仙人の隠れ栖に犬吼て
横に山人は常の事し白と黒に仙家の犬
ふりわけ、りなる小野の庄雨　宗砌
駒の髪に振分と出をの、かた雨いと珍
らし　行雨ゆへふりわけけりと出たり

花そころの中　専順

ゆくもとき芦もこまの乱れ髪

独吟

傳へきや忍ひし世この物語　兼載
や、音高し濱松のかせ
前句の物かたりを濱松物語にして傳へ

きやを風の音にとりなしてなり面白き
又かへなり

夢菴呉隣附句の中

むすふともなく水そなかれ、
名にたてる玉の緒琴の鈴鹿山　牡丹花
是又鈴鹿山に琴を結ひていたされたり
水をすゝか河にして面白し

名所連歌の中

わつかなる菴の中をたち出て
世に名そ高き不二のたけ姫　兼載

前句のわつかなる庵とあるより竹とり
物かたりにとりなして不二のたけひめ
と出されたるめつらし

名所連哥の中

いかゝ、岩根の床にあるらん
旅衣こよひそかくるいかこ山　能阿
前句は岩ねの床にはいかゝ有らんといふを衣を脱る衣架にして名廣いかこ山によせてせられたるいと工し衣架をいかほの浪によせて定家卿の哥にもあり

猶あまた有へし

獨吟のあらはの中

頃て報んたにこそあれ　心敬

山高くのほれはくたる阪ありて

前の句は天敬のむくひし夫をめつらし

くとりなされたる物なり坂をおりのほ

りをる実景をぬとやいふへき

徒渡の國に傳りたる狂吟渡の渡りに

春の日の跡遠くきて暮る野に

なかくはそはぬ旅のたち連　宗祇

附こゝろは聞えたる通りし旅のみちつ

れめつらし

老葉集

末はるかなる山本のたを

旅人のこゝはりもてる野は芳て　宗祇

是も附ろ處は聞えたる通りし旅人のこ

はりもてるいかめしき有様珍しくした

てられたり志にこゝろし

名所連哥の中

法にし入や敷しまのみち

香なる片岡のへに労れきて　紙阿

前句の法に入哥のてといふを達磨と大子が問答にしてしなてるや片岡山の飯にうへての歌もて片岡をかろく附られ一句旅にしてなどといふに労れてとまてせられたる面白し

同

上を望める歌のことの葉

しることはかた岳山の旅のて　宗祇

是も前に同しとりなしし上を飢に見か

へてことの葉のてをしることは難しといふ心を片岡にかけて面白し

竹林集

人もこそゆけかた岡のて

世中を出はやあはれ親もなし　智蘊

是も前におなしかた岡に親もなしと附られたる面白しふせる旅人あはれ親なしとあり

獨吟

春の日永し身は飢てけり

しなてろやことしも去年の花はみき　正徹

是も飢といふに前の哥にてしなてると
ことゝ葉をかりて附られたりかた岡といい
はすしてよくきかせたる物しなてる
は品たてろの畧訓品〳〵の花し

萱草

情ある人をや親とたのまゝし
くれて宿とふかた岡のさと　宗祇

是も前におなし人をおやといふに日暮
に宿とふ旅又とおもしろし以上五句等
類の附て、ろなり　約束遠はす

名所連哥の中

夢の告をもしまはたのまし
旅寐してふるき跡見る須磨の山　宗祇

夢のつけといふを源氏物語須まの巻に
して思ひよせられたり面白し

同

親のをしへの誠をそしる
夢故や須まの恨みをわするらむ　心敬

是も親の教を須まの巻にして夢故附ら

れたり附心句作りとも工なり

佐渡本　獨吟

明はつるあられましりの月の夜に
しくや鹿島かいその岩波　宗碩

禁中の霰走を名不の鹿角のあられに見
かゝて軽を施を附られたる手際面白き
作意し　あられふる鹿角か崎とよめりあ
うれの音のかしましきことにかけてし

同

君かこゝろをとる人やたれ

入舟の櫂音すなり空の海　宗砌
前句の君に空とるに櫂は附られやすら
かにして尤工なる作意し

附句集

都を跡になすも物うし
遠けれと君すむかたを枕にて　基佐
前句の都を跡といふを旅ねの枕に足か
へて跡の字をうとかして附られたる粉
骨考妙こ

宗長十七回追悼獨吟

いつかはおもふかひもあてきし

さやの山横ほろ雪に行やらて　宗牧

前句の意を尺かへてかひを甲斐の国に

して甲斐ヵ水をさやにも見しかけいら

なく横ほりふせるさよの中山の音にて

仕立さやの山とはかりせられたること

めつらしく面白し

伊勢怪楽千句

夢たにうとく中を嵐ゆく

こえわひぬ夢の枕のさよの山　宗長

是もさよの山と出たり前句の中の字に

あたりてのあ尺かへ好し心を附て味ひ足

るへし

老のすさみに

覚やすき夢の俤中〳〵に

俊 疎くやしきさよの山かせ　専順

是も前句の中といふにさよの山と附ら

れたらさよの中山なか〳〵にとりふ音

もあり面白し

明 ほの〻うはらの中独吟

いかゝそらねの暁の名
さよの山有明の月に起出て　宗長
是又さよの山とせられたり空音の名に
さ夜の山めつらし
寶徳千句　龍忠
まつ夜へたてゝつらきさ衣
出明の瀬戸にこゝろを筑紫舟　玉誉
前句のさころもを狭衣物語に足かへて
出明の迫戸に飛弓井の姫君身仮捨られ
しことにして面白し

文安連歌
飛鳥井のあさくは笑たのまめや　宗砂
舟ゆきちかふ出あきのせと
是又飛弓井といふをさころも物語の前
の心にて見か面白し

竹林集
扇をかたみ爪こゝろせよ
616 出明や夏のひかたの夕すゝみ　宗砂
是亦扇といふを狭衣物かたりにして出
明と附られたり夏なれとも爰に入

家集

かへらし物と身を捨る人

宮明や瀬戸こす舟のおきつ波　心敬

これもさこころも物かたりにして附心前

におなし附方の規則よく思ふへし

花そこころの中　忍誓

ひきかくるきぬやふせ籠に匂ふらん

けふりの末の冨士の白雲　原春

前句のふせ籠を不二のかたちに見て恋

の見かへ寄物し

同

水のへには波そこえくる

舟にくむあかさへのりの為なれや　宗砌

前句水のへにといふを舟に入水にして

一句のしたていかにもおもしろく上手

の物し

園塵集

遠くきにけることの悔しさ

星をいたみやとりをけふは出も

前句は國遠くへたてし旅なり夫を旅行

一日の行程遥かなるにして是を痛み
とせられし事拔群の作と

獨吟

やすくなをも安くなす人
一さほにこすはや河のわたし舟　義我

前句のやすくなき人にあたりて渡守成
つけ一句の仕立ぶりやいはん一さほに
こすのこと素文拔群し

賣僧千句　超心

釣簾の中なるおもかけは誰
旅寐する大野の原の夜の夏　原秀

足は釣簾を名所こすの大野にして恋成
尼かへ誰伴といふに寄て夏成附られた
る称号又と考こ

独吟心あらはの中

本からしの時しもあらし吹出て
袖まくりする野路の朝立　仙敬

是は木からしに旅人なとの袖をまくり
手にしてゆくと附られたりまくり手は
木男におほくよみきたれり朝立といふ

こと葉のつらし

春夢草

たつねはいつち身捨し人

大海にゆくゑはるけき生田河　牡丹花

前句身をすてしをやまと物語　菟原未通女の生田河に身をなげしをたつねはいつちといふ意を込られ一句の上は生田河海辺故海になかれ入やと附られたり

面白し

文安千句　日蔵

彼国はいつれの品もたりぬへし

名を九にわくる筑紫路　生阿

前は彼国尺教にて九界の浄土なるを九品にとりなして筑紫の国ともいへは名を九にわくると附られたること短句にての句作り殊る慶なく字ゆること目を驚しめ

佐渡本　享徳連歌

昔の歌のたそ殘れる

石見かた名のみ高津の浦さひて　忍誉

昔の哥を柿本人丸にして名のみ高角と
つけられたるめつらしく哥ぬし

三島千句

宗祇

宮も藁屋もはてはしらめや
逢坂や誰ゆき通る夏なら む

前句は世中はとてもかくても有ぬへし
みやも藁屋もはてのなけれはの哥し夫
をあふさかにして四の宮せみ丸の藁屋
に見かへと一句は旅をつけられたる粉
骨なる作とや申へき

紀そころの中　紀心

うらより遠の海人のもしほひ
熊野をなかれ出湯やけふるらむ　宗砌

浦より遠といふに熊野の温泉を附られ
てもしほにあたりて出湯のけふり自至
なり

竹林集

上か上にとおもふ彼國
かさねたる筑紫の綿も寒き夜に　駿盛

是又前句は上下上生の天数を九州の錦

に見かへられ彼國といふに猶面白くつ
けられたり寒き夜にとせられたるにて
上か上と却ふわたよく聞せられし物
と連奇は句作によりてよくもあしくも
ふるくもあたらしくもなること思ふべし

訪石集

饌所の雑士も赤裳をそきる　東入庵
大海老の売むきをけろ中にわて
附心は聞えたろ通りなり海老のからめ
つらしく赤裳にあたりて奇し

文安千句　雁路

蛤は霞めろうちに拾ふ貝　盛家
ゆふへは月の色をふくめる
前句はまくりにふくめるといふ言葉も
て附られたり貝にふくむといふこと葉
を入てよみたろ歌もあるしめつらしき
物）

同

月をふくめる夜はの白雲
貝ひろふうらかけてよろ沖つ波　自笑

是も前句ふくめるに見こめつらし

園塵集

出る扉に袖をこそとれ　蕭成

山里は荊枳枝しけみ

前句の袖をとるといふにむはら枳のし

けき山さとさも有へしからたちめつら

し附心句作又たくひあるましくや

任よし千句

書もいをのみわぬるさひしさ

身をは只朽たる木とも思ひなせ　芝空

前句書庶といふに宰予は思ひよる事も

あらん欲夫を身を朽木とも作意れ虜の

外とや中へき

十解秘訣の中

犬こそ人の守りしけれ

みとりゐの額にかける文字を見よ　良時

犬の額にかける文字をかけるはふる

きことにていまもする事ゝ前句人の字

りといふにいよ〳〵よき附心なるへし

面白くや

花そころの中

弓箭の跡の犬といふ文字

ゑまのひたいの髪をふり上て　宗砂

犬といふ字にみとり子は前におちしさ

れとも是は前句三韓征伐の句にて甚大

事なるを嬰兒の髪を振上てと安く附な

してよく陽かせられたるこそ例の自在

の句作なれ

寶徳千句　紹巴

いまこんといひし限りも長き夜に

暁かけてきつねなくなり　宗砂

いまこんをきつねの鳴声にとりなして

又めつらしき作意」

萱草

芦むらくの真砂地のま

跡さひし声みたれつる鶴の庭　宗祇

是又あしを足にそかへて真砂にもまり

の庭にも出合よきなり末といふに跡ま

て出て一字もものかすおもしろし

同

舟差出る春の水うみ

静なる時代をさるもゝにて　宗紙

是又やすらかにしてゝふかき處あり舟

指出す湖といふを花鬱か身退きて舟を

湖に浮めしにして附られたる物と差出

すといふ言葉をよく押へられたる務胥

思ふへし

古写本の中

いかにして世のつらさをは厭はまし

生れしよりもをめる山人　基他

前句はいかにして世を逃れんといふ述

懐の句を山里に生たちたる人はうしと

てのかるへき山はあらしとめつらしく

とりなされたり世を捨て山に入人山に

ても猶うきときはいつちいぬらんの哥

の心も有し

他渡本　享徳連奇　心敬

蕁むすつゝみうつ音もなし

澹にかけるいはほも壮も離に作て　雪順

前句の音のなきつゝみを雲にとりな

鼓の瀧と附られ苺むすとある故歳も世も瀧に似たるとうたかひたる附心面白きことといふはかりなし

拾遺集　肥後の名所　音にきく鼓の滝をうち見れは岩山川のなるにそなりける　よみ人しらす

熊野千句　宗怡

みやまは四の時もおほへす

聞わたる鼓の瀧は名のみにて　　之次

是も四季を覚えぬといふを時と、りて鼓のたき又面白し

萱草

見ふく時の移るほとなさ

たきもの、袖の下かせうち薫り　　宗祇

前句は尺教しかも難句なるをふくといふに風を附見は香合なとに尺て移るといふこと蕉にも出合よく一句幽玄にして袖のあつかひ方妙

今句集

結れは人の偽そあるる

年を身に隠すや老の物ならん　　宗長

つもれはといふに老を附いつはりにとしをいひかすめぬることにしてよくき

かせられたりとしをとはれて物うき老
の人情さも哀へし

花そころの中

柱とは朽たる木をやよもなさし　宗砌
ありのすさびに身をもたはや

前句の朽たる柱に蟻をふくみて附られ
一句は世にありのすさびに出身の述懐
にして柱に身をたとると近一字もかさ
す附られたる粉骨の程是等をや不意に
出るの作ともいふへし

花のまかきの中

一むかしなる夏の世の中　牧阿
又やんいまこそ伊勢の宮造り
一むかしを伊勢の宮つくりせ一年の間
にして一句面白し又やみんのことは甘
心の物なり

花そころの中

野辺にかる市茅か軒の一首　専順
めくりそあへるあたらしき月
是も前句は伊勢の宮造りなりされは一

皆にめくりあふ新月を附られたる句作
面白し附句秋なれとも等類故爰に入

花のまかきの中　　牧陳

心のすちはふたつあるを
ひたすら右肩には髪をゆりかけて
心のすちのふたつといふを髪にとりな
しゆりかけてのこと素珍らし

古笠本の中

末もつゝかめ山本の庵
紫の庵水くむ迄はたち出て　　基佗

前句は常にあろやすき句を大事にとり
なして末も続かめといふに水くむまて
はたち出たろ作意妙なり

獨吟

なかめ及はめあまのはしたて
日暮れは沖つしほかせくもりきて　　兼敬

前句の詠め及はぬといふはえもいはれ
ぬ景色なりといふ句こ夫を夕くれにし
ほ風のこもりきてめの及はぬとひき迄
へて附られたろ珍らしく面白し

狩場

詠め及はぬおきの遠山　牡丹花

夕霧に鳴尾の舟路うらかなし

是も前とおなし附かたし夕霧と附られ

たるにて眺の及はぬ處よく聞えたり附

方の約束又かくの通りし

前句附の中　心敬

杖を力に出る狩人

重からぬ柴にもやすむ翁さひ

翁の重荷をおひたるさまに前の狩を見

かへて重からぬのこと茶ことに面白し

狩を苅に見かへたること是等を権輿と

もいふへくやいまは常の事に成たり

心敬発句の中　三甲

昨日も今日も神祭るころ

かたふけるは中酉の時迄て　宇治

二月申の日春日祭四月酉の日加茂祭に

して之昨日けふに申の日酉の日の祭を

附られたる面白し

竹林集

なくさめをけるまのはかなさ

子は伺らぬ旅をまたしらて　心敬

前句は恋にてなくさめをけるといふを

みとり子の魚心の附あはれにおもしろ

く侍る

寶德千句　宗砌

打双六にかくるのり物

角をふる牛の心はおそろしや　超心

前句ののり物に牛を附つのをふるはゆ

六の賽にして附心ユし

家集

稀にとふ音信はかり聞なれて

埋山さとの前のたなはし　心敬

前の恋をやすく〳〵と過れたる附心山さ

との柳はしさも方へし面白し

大永千句　宗碩

憂名をも思はて物をおもはゝや

ふかきいはほのやとりせまほし　宗長

西行法師の哥にはるかなる名のはさま

にちとりゐて人めおもはて物おもはゝ

せ此ことはによりても　のおもはゝや
といふ前句故いはほと附られたり一句
やすらかにしてふかき處あり前句をよ
く味ふへきこと思ふべきし

伊勢恬乎千句

幽なるいはのはさまのちとりみに　宗長
おもひいつるもいにしへそうき
是も西上人の哥にてしたてたれは又お
もひ出るいにしへとつけられたる心前
におなし

信よし千句

音になくは蛙も何をおもふらん
岩のはさまは春なかりけり　宗碩
是亦前句の思ふらんといふてにはをかり
て前の西上人の哥にて附られたり此句
春なれとも附方の等類故愛に入面白き
作意なり

家集

いはのはさまも身はをかれけり
忍れは音にたてやはなけかれむ　基佗

是も前の句にて前句の岩のはさまといふに忍ぶ身は十分になけくことさへならめと附られたり面白し是また意の句なれとも附方の規則迄はさる證として義に入

壁草

假の世とおもひとろこそあはれなれ　宇長

竹を柱に芦ふけける庵

前句の世に竹とろといふに紫な附られて一句面白し

住よし千句

身より下なる身にそなくさむ　竟宝

何のため鳥獣もうまろらん

身より下なるを禽獣にして面白し

草庵千句

跡みえぬ井桁はいつか朽ぬらん　宗祇

むすひし縄そしろし残れる

前句の井けたは朽たるに縄斗は残りたるると附られたり井をくむに縄なと尤有へし一句の上は結縄の文字なりいと工

とや申へき

八幡拾玉獨吟

たちめる、霞も雨もこまかなり

はくや朝の塵の數〳〵　宗長

是も前句たちめる、雨のこまかなりと

いふに塵を附て塵をはくといふ事めつらし

俊渡本　享徳連歌　忍誓

山かけに形ばかりなる苔の門

汐干の磯屋荒す波かせ　宗砌

前句の山陰を城山陰にして形を汐干江にして松の門にも海辺のけしきよく附られたる物なり

獨吟

ひとり〳〵にはれる山路

谷せはみおれる新やさはるらむ　夢窓

ひとり〳〵といふにけけしき谷を附ら

れ薪のさはるとも出たるにてそのつから

山賤松の行つれたるか一人〳〵になり

たると聞せられたり面白し

三島千句

柱かたふく橋の絶く　宗祇

直す木もさはるそま山谷ふかみ

前句の柱を答もて直す木にして橋に答

しかたふくとあるる故さはるとせられた

る粉骨ろめし

五色狐吟

物いひかはす宜祢か唇　西徹

さとのゑのよわしらけつゝ哥うたひ

前句の宜祢を杵にして米しらけつゝ哥

うたふのとりなし珍らしく自在なる附

かたとや申へきおもしろし〳〵

佐渡本宗祇追善奇他狐吟

只何ことも心は、き、の上

賢きはとなりを移すゆく方にて　牡丹花

前句のは、き、を孟母にとりなされた

ることめらしくおもひもよらさるえか

へなり

文安千句　軒

黒きは髪か花田なる帯

乱れなき世に高殿人もつかへきて　宗砌

前句は恵之髪にあたりて乱れなきと出

花田の帯にこま人こ石川のこまうとに

帯をとられた花田の帯の中は絶たるとも

あり方の附なり

大永千句

過れぬ六のをはあさまし

暁の法のつゝみのうちなけき　竟空

前句過れぬをといふを暁六の時をしら

する鼓にしてめつらしく附られたり

為所連寄の中

夜金やくし太刀作る人

吉備の山中を渡きて吹風に　宗砌

夜かわふくきひの中山帯にせる細谷は

の水のさやけさの寄にてしたてられ夜

かわに吉備太力にしのきといふ縁語も

て中を渡きてとりなされたる面白き

ことといふ斗なし他の及さる慶なり

然歩千句　道賢

紅葉する北山本は雲もなし

菜寺の木陰れのみち　常安

附こゝろは聞えたる通りなり北山本と
いふに菜寺と附られたる所句となくけ
しきおもしろく菜寺めつらし

連歌仙の中

武士の軍の場にゐ残連て　行助
なからん跡を誰にとはれん
軍をかろく廻れて面白くとりなされた
りいはゆる大事の句はかろく附なしや
すき句は大事に称賞すること是等にて
無ふへし

寶徳千句　感承

みさひふかむる忘井の庭　宗砂
是や此とく焼太刀のとなみは
前句みさひといふに太刀をとくと附ら
れとなみはなと一字ものかれさるとり
なし例の自在の作意なり

文安千句　感家

沖なる舟は帆はかりと足ゆ
めしや誰松を柱の磯屋形　宗砂

前句の帆に柱舟に屋形し磯やかたこと
にめつらしく海辺のけしき見るやうに
面白し

韵字獨吟

弓とるのみか又太刀もつ　西徹
三日の月さいはの水に舟さして
前句の弓に三日月太刀にさひにし指と
近附られたり弓のとりなしし此句秋
なれとも前の太刀の等類故愛に入

竹林集

2730
苦しのふの露そみたる、
わすれ草花の心をたねなれや　智溫
しのふに萱草を附花の物わすれをおも
しろくとりなされたり

同

2476
よはく成ゆく山かせの声
鏡遠き里には夢や殘るらむ　心敬
附心は聞えたる通りにて此句り越千句
に附られたる句にて此千句を繰返し見
る度に兼て感心の物し　かね遠くして

夢の残りたる里句作あしく附いはゝ只
常の事にて甘味あるましきを句作の面
白き事全情いふはかりなし唯こ連哥は
一句の作りかたにていか様にもおもし
ろく聞ゆるし句作拙くしてはたとへよ
き趣向も無下に尺くろしく識者の笑た
ろへし

竹林集

2758 袖にあまるやわか日音羽河
せき入て落す瀬もかな花の波

智蘊

音羽河せき入て落す水の音にの哥にて
一句をおもしろく作られたる物し花の
述懐さこそおもひ侍る

同

荊棘したる芦の一むら
袖めらすわか世の末は短くて　心敬
前句の芦に男ひもよらめ花の述懐をお
もひよせられ苅とりふに袖めらすの初
五文字ことにかありて案外の作なり

同

2482

やつれゆくこそ旅姿なれ

後の世しや、近くなる身の老て　　満網

前句やつれゆくとりふに冥途の旅をよ

くきかせて附られたる物し此旅は誰も

やつれ姿なるべし

2498

同

住とはしるや遠き世間

まろ竹のかけ水うくる里續き　　賢盛

筧を懸水とは常の事しぬ竹のかけ水玲

らし

2512

同

水に向へはわれそうたかた　　智薀

消やらぬ頭の雪のますかゝみ

前句をうけて水かゝみにとりなしわれ

そうたかたおもしろくや

他渡の本

なけ郭公五月雨のうち　　宗砌

一こゑにまよひの雲はぬきすは常に有物しそれを

前句のほとゝ

弥陀の一声まよひの雲とつけられて時

鳥をめつらしくとりなされたり

佐渡本　岩清水法樂獨吟

夫とも見えすかけろ秋つ羽　　牡丹花

ことのはに國の姿はあらはれて

前句かけろといふを書に見かへてこと

の葉と附られ秋つ羽を此國の形蜻蛉の

ことくといふにしたてことの葉は國風

のみゆろとこゝにして面白し

家集

きゆろ水をつたふ白露

みふきはに身振ふ鳥の毛はぬれて　　心敬

前句のつたふ白露を身ふろふ鳥の翅よ

りつたふ露にして水際の初五文字こと

におもしろく実景見ろやうなり鳥の身

振ふ又めつらし

古写本の中

花をいとへる程のあはれさ　　心敬

みとり子の面きらひする人を見て

花をいとへるといふを嬰兒の面嫌ひめ

つらし

同

頃て立名と成そかなしき　心敬

なき人の塚のそとはの文字を見て

前句の恋を尺かへてたつなといふに卒

都鑒を附られたる妙し

同

門させりともみえぬ故郷

白波しおしひかけしのわひ人に　宗長

俗人は盗人の恐れなきことにして一句

の作意妙し

獨唫心あらはの中

あらき汐瀬の舟そあやうき　心敬

しら浪のまつらんそにこゝろせよ

是も盗人を白波として前のあやうき舟

といふを海賊の恐れにとりなされたり

面白し

大永千句

物の怪も心あさきやしらるらん

あなにくゐに出しきつねそ　宗長

物怪に狐めつらしく狐に穴にくし又め

つらし

同

あまつてせよ何契りけん　宗長

すむ家はあやしの竹の中にして

前句の恋のをとめを竹取の物かたりに

とりなされたる面白し

園塵集

心よりまよひさとりは有物を　兼載

空しきそらに四方なさためそ

迷故三界城悟故十方空を短句にてきか

せられたる手際奇妙し

竹林集

おもかけはひたりみきりに立そひて　心敬

会すろ哥のいにしへの人

九右の面かけを時代不同歌合にして附

られたる奇妙し

園塵集

作れる氏を水をたのしむ

湊ににけふあたらしき舟かけて　兼載

作れる田といふを新造の船に見かへら

れたる一句もおもしろくめつらしき作
と

下草

向ふ日かけもしらぬふもと　宗祇
乗出てゆく〳〵眠る馬の上

旭の移るもしらす馬上にねふりたる旅
人さも有へし馬上の睡めつらしく実景
と

竹林集

迄しむかしをくみやしろらん

2360

入る由の心第結ふ手はこ　宗砂
前句くみやしるらんといふに心第をつ
けられたりこゝろはは糸杯にてくみた
る箱の餅りしおもしろし

同

三葉四第の家そさかふる
物部のゑひらの箭並色〳〵に　宗砂

2320

前句はさき草の三葉四第し第を羽に見
かへて矢なみと附られ一句の作意抜群
の物とや申へきし

萱草

博士のゑはいかゝ遊はん

こゑをひく法の行ひきかまほし　宗祇

前句のはかせのゑのたかはんといふを

称名引声のことに見かへてこゑを引の

りとつけられたるめつらしく面白し

同

妙に遊ひの其めしや誰

夕波の江口の月に舟とめて　宗祇

前は只遊興の句こ夫に江口の舟にてあ

そひを遊女にとりなされ妙といふに西

行法師の歌の心をとりてよくきかせた

るものし　珍らしき作意とや申へき

竹林集

そこともしらぬ海の中道

2384

誰か尺し名にこそ龍の都なれ　専順

そこともしらぬを底ともしらぬにして

海の中ゑに龍宮を附られたる物哀とも

やいはむ妙し

寶德千句

浅澤水に魚はうこかす

すみよしや宜弥かひれふる神慮い　宗砌

前句の魚は動かすといふに宜弥はひれ
ふるとして袖といふへきを魚にあたり
て磐と出淺沃水を住吉の神前にせられ
かみあそひのこと系前句によく出合て
句となく社頭の静なるけしきみえて絶
妙の作し

名屬連歌の中

いけろ物皆情なからし

神は世にひかりをはなつ八幡山　專順

前句のいけろを放生會にしてひかりを
はなつと附られたる作意又こ妙し

同

猶むつましき水茎のあと　專順

かき寫すすみのになから上久て
水茎に繪は常の事しむつましき水茎と
有故住吉の画にして一句のうへかき写
す住よしは筆にかけはは繪にかけてか
みさひに紙ちてかゝりたり是亦他に有

ましき粉骨むつましきを瑞籬の久しき
代よりの佳吉の哥にしておもしろき事
いふへからす

竹林集

ふむ跡ゆゑ霜ぬ**ふる道**

3040

白髪なる神の宮人昔はきて　宗砌

霜に白髪ふむ跡に昔は聞えたる通りな
りけりとなく神祇の句作多妙にしてしらか
又めつらし

同

同

かけ移ることそかゝみなりけれ

3080

誠には神やかたちもなかるらん　心敬

附句は聞えたる通りゝ附句の作意面白
し

同

数さたまれる歌のことの葉

3070

百敷や百の司の昔冠　宗砌
前句の数さたまれるに昔冠の哥めつら
しく面白し

同

松浦の山そうみをかけたる
白たへのかゝみのみやのゆふたすき　宗砌
是ぞ松浦にかゝみの宮を附られたり海
をかけたるにかゝみおもしろしたすき
とまて出たり

大永千句　宗長

のむ〳〵酒に身をやわすれん
神代をも鹿のほ上におもひやり　聽雪
前句酒をくむなと、は常の事なりのむ

〳〵とあるによりて出雲八またの大蛇
にして身をわすれんといふによく聞か
せられたりひのほ上とはかりにてやす
〳〵と神祇の句に附させられたること
凡慮の外し

是はとしころ見及ひたる古代連歌のうち作者
の粉骨成心のあまり從に見すてかたき句又は
附方の規範とも成へき句〳〵ひとつふたつかき
つけぬるにはからすも四百五十句あまりにな

り如蓋し筑波集なとに入て世に普く聞えたる
句旦紹巴時代より後の連哥はとらす宗牧法し
まて先達のふかく心を用ひられたる句とゝか
き記して傍にいさゝか愚案を注し侍りぬ

知周

文政十二年三月

門人正駕謹書

[illegible]
石田元季
氏ノ記ナラン

高橋知周ハ伊勢ノ人也香川景樹門人にて
高橋殘夢木下幸文等と相結盟すゝ律會格式
に精通せり其学ハ本居宣長に淵源すと云ふ
大日本人名辞書に委しく其傳記を載すれ
ども乏へし

明治十年五月雪
後面浮彫
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]